



枕草子「風は」の段「黄なる木の葉どものほろほろ
とこぼれ落つる……」と和漢の伝統：
黄葉紛々如涙庭と、文脈のスリカエ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-01-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中島, 和歌子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007220

枕草子「風は」の段「黄なる木の葉どものほろほろとこぼれ落つる……」と和漢の伝統

—黄葉紛々如涙庭と、文脈のスリカエ—

中 島 和 歌 子

一、はじめに

『枕草子』研究における問題点の一つとして、論じられる章段に偏りのあることが挙げられるだろう。本稿では、ほとんど注目されない箇所にも立ち止まってみるべき一例として、「風は」の段末尾、「九月つごもり」以下の三文を取り上げたい。

三巻本と能因本で直後に位置する「野分のまたの日こそ」の段は、『源氏物語』（以下『源氏』）野分巻との関係を中心に、比較的論じられることが多いが、本段については、注釈書類でもあまり注が施されていない。しかし、『枕草子』の本質を明らかにするために、重要な文章だと思われるのである。

前稿で『枕草子』を表現史上に位置づけることの重要性を述べたが⁽¹⁾、本稿は、そのささやかな試みの一つでもある。用例をあえて多めに挙げたので長くなってしまう。寛恕されたい。なお、五節で「まとめ」として二節から四節の要点を述べた。

まず、「風は」の段の全文を挙げておく。本文・章段番号は

松尾聰氏・永井和子氏校注・訳『新編日本古典文学全集』（以下『新全集』）に拠るが、改行箇所は変えた所がある。傍線や括弧等はすべて稿者に拠る。他書の引用においても同様である。なお、旧字体が使用されている場合は新字体に改めた。

(a) 風は 嵐。三月ばかりの夕暮に、ゆるく吹きたる雨風。八、九月ばかりに、雨にまじりて吹きたる風、いとあはれなり。雨のあし横ざまに、さわがしう吹きたるに、夏とほしたる綿衣のかかりたるを、生絹の単衣重ねて着たるも、いとをかし。この生絹だにいと所せく暑かはしく、取り捨てまほしかりしに、いつのほどにかくなりぬるにかと思ふもをかし。暁に格子、妻戸を押しあけたれば、嵐のさと顔にしみたるこそ、いみじくをかしけれ。九月つごもり、十月のころ、空うち曇りて、風のいとさわがしく吹きて、黄なる葉どもの、ほろほろとこぼれ落つる、いとあはれなり。桜の葉、棕の葉こそいとくは落つれ。十月ばかりに木立おほかる所の庭は、いとめでたし。

(一八八段)

「三月ばかり」以下について、『枕草子講座 第三巻』の「枕草子鑑賞」(一九〇段、高橋亨氏担当)は、「雨風」(能因本「花風」)の語が『源氏』藤裏葉と共通することを指摘し、『講談社学術文庫』の「余説」(一八九段、鈴木美弥氏担当)では、さらに次のように述べられている。全文引用しておく。

三月、つまり晩春におだやかに吹く雨風とは、とりもなおさず花を散らすそれである。作者はわざわざ「夕暮れに」と言っている。夕刻から吹き始めた風は、やがて視界のきかぬ夜をも吹いて、翌朝にはたくさんの花びらを落としてしまうのだろう。端的な表現ながら、そんな惜春の気分がよみとれる一文である。この、花を散らす「雨風」については、『源氏物語』藤裏葉の「心あわたたしき雨風に、皆散り散りに競ひ降り給ひぬ」という文で閉じられる一場面が参考になるだろう。時は三月二十日、やはり暮春である。冒頭部には「花はみな散り乱れ」とあり、また、「あはれなる夕べのけしきに、いとどうちしめりて、雨気あり」と人々の騒ぐに」ともある。この雨を避けようと足早に家路を急ぐさまを表現したのが引用部分である。したがって、この「散り散り」は、直接には人々が散り散りに帰る意を表すが、やはり「雨風」の縁で用いられた語である。「雨風」は「花を散らす」とも繰り返されているので、「散り散り」は「花」(落花)の縁語と言い換えてよいのだろう。次に、末尾の三文のみ、三巻本(三)以外の本文も挙げておく。本稿では三巻本を中心に扱うので、ゴシック体とした。

能因本(能)：松尾氏・永井氏校注・訳『日本古典文学全集』(以下『旧全集』)一八五段

堺 本(堺)：速水博司氏著『堺本枕草子評釈』二二三段
前田家本(前)：田中重太郎氏校註『枕草子新註(前田家本)』(以下『枕草子新註』)二一八段

類纂本系統の「風は」の段(堺五段・前一二段)は、雑纂本系統の本文の前半部分のみで、本稿で取り上げる三文は、独立した一随想章段となっている。冒頭の「おなじ月」は、前段(三巻本では後掲(e)に当る)の冒頭「九月ばかり」を受けている。

三〥九月つごもり、十月のころ、空うち曇りて、

能〥九月つごもり、十月ついたちのほどの空うち曇りたるに、
堺〥おなじ月のつごもり、十月のついたちなどに、空もくもりて

前〥同じ月のつごもり、十月のついたちなどに、空曇りて、
三〥風のいとさわがしく吹きて、

能〥風のいたう吹くに、
堺〥このはさそふかぜのさはがしうふきたるに、

前〥木の葉さそふ風のさわがしく吹きたるに、
三〥黄なる葉どもの、ほろほるとこぼれ落つる、

能〥黄なる木の葉など、ものほろほるとこぼれ落つる、
堺〥きのはのほろほるとこぼれを落つるこそ、

前〥木の葉の、ほろほるとこぼれ落つるこそ
三〥いとあはれなり。

能〥いとあはれなり。
堺〥いとあはれにをかしけれ。

前||いとあはれにをかしけれ。

三||桜の葉、棕の葉こそいとくは落つれ。

能||桜の葉、棕の葉などこそ落つれ。

堺||ことものよりもさくらの葉こそ、いとくおつるかし。

前||ことものよりも、桜の葉ぞいとく落つるかし。

三||十月ばかりに木立おほかる所の庭は、

能||十月ばかりに木立おほかる所の庭は、

堺||おほかたの、そのころこだちおほかる所の庭は、

前||おほかた、そのころ木立おほかる所の庭は、

三||いとめでたし。

能||いとめでたし。

堺||まことにしきをはれるなど見えて、めでたきものなり。

前||まことに「錦をはれる」と見えて、めでたき事なり。

以下、各節で一文ごとに解釈しつつ表現の特徴を見ていく。

一、「黄なる葉どもの、ほろほろとこぼれ落つる……。」

九月つごもり、十月のころ

「八、九月ばかり」(能「八月ばかり」)に続く季節を表している。

萩谷朴氏校注『新潮日本古典集成』(以下『集成』)

には、「三月の春雨を伴う風、仲秋・晩秋の嵐、そして初冬の

木枯らし(夙、萩谷氏注)と、季節の順を逐って、風の変態を

取り上げている。」とある。時の流れと季節の推移(光陰と時節)

に対する意識は、本段の構成だけではなく、「八、九月ばかり」

以下の文章中の、「衣」という一種の身体感覚による感慨(前

掲(a)波線部)にも表れていた。

続く「十月のころ」は、他系統ではみな「十月(の)ついた

ち」となっている。杉山重行氏編著『三卷本枕草子本文集成』

に拠ると、三卷本系統諸本はみな「ついたち」が無い。確かに、

後の「十月ばかり」のみみち散り敷く庭の描写との関係からす

ると、落葉しつつある季節は少し前、つまり「十月(の)つ

いたち」のほうがわかりやすい。但し、萩谷氏著『枕草子解環』(以

下『解環』)には、「ばかり」が「相当に長い期間」であるのに

対して、「ころ」を用いた当該箇所は「九月晦・十月朔にまた

がる短い期間」であり、第二段「ころは」が「短い時期につ

いて随想していたのと、歩調を合わせている」とある。これに拠

ると、三卷本の「十月のころ」は、後の「十月ばかり」とは異

なり、他系統の「十月(の)ついたち」と同じ意味であって、

本文には何ら問題が無いことになる。『解環』の「九月の末と

か十月になった頃」という訳が適当であろう。

空うち曇りて

堺本・前田家本には「うち」が無い。能因本は「うち曇りた

るに」なので、曇りの状態であったことになる。三卷本の場合

は、「さつと曇って(風がとても激しく吹き始め)」とも解す余

地がある。現に『解環』は「嵐」の具体例と捉え^(a)、「空が急に

曇って」と訳している。但し『枕草子』のもう一例(b)を見ると、

明らかに曇りの状態が続いている場面に使用されており、必ず

しも「うち」に急変を読み取らなくてもよいようである。

(b)見物は……賀茂の臨時の祭、空の曇り寒げなるに、雪すこ

しうち散りて、……祭のかへさ、いとをかし。……日は出
でたれども、空はなほうち曇りたるに、…… (二〇六段)
風のいとさわがしく吹きて

能因本は「風のいたう吹くに」なので、前の「雨のあし横ざ
まに、さわがしう吹きたるに」(三・能全く同じ)との形容詞
の重複が無い。堺本・前田家本は「このはさそふかせ(風)の
さはがしう(く)である。諸系統間に若干の違いが見られるが、
意味的にはほぼ同じと見なせる。

暮秋の木枯らしと頻りに落葉する様との組み合わせは、例え
ば次の「千載佳句」(金子彦二郎氏著『平安時代文學と白氏文
集』)に拠る、以下「佳句」所収の句にも見られる。但し、こ
の句では「風」による「落葉」という因果関係は見られない。

①霜露うて草逕寒風急なり 雁度つて秋林落葉頻なり

(『佳句』四時部・暮秋・二〇七・沙門大閑・代雷孝廉送

経州李判官)

黄なる葉ども

能因本の「黄なる木の葉」が最もわかりやすい。堺本の「き
のは」は、直前の「このはさそふかせ」(堺本系統すべて)と
区別されているので、「黄の葉」と解し得る。但し『堺本枕草
子評釈』によると、十七種類の伝本のうち、「このは」が三本、
「木のは」が五本、その他の九本が底本の朽木文庫本と同じ「き
のは」であり、圧倒的多数とは言えない。また、前田家本は「こ
のは」であり、色が含まれない。但し、他の類纂本独自章段に
「きなるは」が見える(堺二〇〇段・前二〇六段^③)。

このように前田家本以外では、落ちていく木の葉は「黄葉」
に限られている。平安時代の和歌において一般的な「紅葉」は
含まれないのである。一方、元輔や順ら『後撰集』撰者が訓読
した『万葉集』や漢詩文には、次のように「黄葉」が見られた
(但し、『白氏文集』には「紅葉」も多いことが知られている^④)。
以下、基本的に訓読を含めて『和漢朗詠集』(『朗詠集』)など
の日本漢詩文は『日本古典文学大系』に(『本朝文粹』のみは『新
日本古典文学大系』)、『白氏文集』(『文集』)は那波本(番号は
花房英樹氏著『白氏文集の批判的研究』)、その他の漢詩文は『新
釈漢文大系』に拠る。

②秋庭掃はず藤杖を携へて 閑かに梧桐の黄葉を踏みて行く

(『文集』卷十三・〇六八四・晚秋閑居)『佳句』四時部

・暮秋・一九九／『朗詠集』上・秋・落葉・三〇九

「黄葉」の他にも、「黄」なる木の葉の表現はある。

③季秋の月、……是月や、草木黄落す。(『礼記』月令)

④黄纈纈の林は寒うして葉有り 碧瑠璃の水は浄うして風無

無し(『文集』卷五十四・二四四三・泛太湖書事寄微之)

『佳句』四時部・初冬・二二五／『朗詠集』上・秋・紅葉・

三〇二)

いずれも平安時代によく知られた句であるが、特に③は、「季
秋」が「九月」であるから、「九月つごもり……黄なる葉ども
の……落つる」と符合している。「月令」を踏まえた表現とい
えば、『古今集』の春の二番歌(春歌上・二・貫之・立春「孟
春の月……東風凍を解く」と、秋の巻頭歌(秋歌上・一六九・

敏行・立秋「孟秋の月……涼風至る」の対が知られているが、本段が「風」に注目していることから、偶然ではなく、「月令」の表現が意識されていた可能性が高い。

また②は、「庭」の語があり（四節参照）、『佳句』所収である点でも注目される。天慶年中に大江維時が編纂したという『佳句』は、『枕草子』に影響を与えた『蜻蛉日記』の道綱母や、清少納言自身も後掲(n)と②のように利用していた¹⁵⁾。

ほろほると

能因本の「ものほろほると」は、『旧全集』に「用例を知らない。不審。」とあるが、「黄なる木の葉などものほろほると」の「な」を衍字と見て削除すると、三巻本と全く同じになる。

「ほろほると」は、『枕草子』中ここだけに見える語である。この用語の特徴を明らかにするために、長くなるが、まず『日本国語大辞典 第二版』（以下『日国』）を引いておく。本稿に直接関わらない例文等は省いた。『岩波古語辞典』も①を最初に挙げ、③②と続く。

①葉や花などが散ったり落ちたりするさまを表わす語。*

枕（10C終）（略）*俳諧・笈の小文（1690-91頃）「ほろ

ほると山吹ちるか滝の音」②涙や水滴などがこぼれ落ちる

さまを表わす語。また、激しく泣くさまを表わす語。*蜻

蛉（974頃）上・天曆八年「又ほろほるとうち泣きていで

ぬ」*源氏（1001-14頃、以下成立年略）賢木「忍ぶれど、

涙ほろほるとこぼれ給ひぬ」*人情本・花筐③集まって

いた人が分かれ散るさまを表わす語。源氏若菜下「僧など

も、さるべき限りこそまかでね、ほろほると騒ぐを見給ふ

に」*源氏夕霧「修法の壇こぼちて、ほろほると出づるに」

④物が避け割れるさま、こなこなになるさまを表わす語。

ほろほろ。*源氏宿木「二人して、栗やなどやうの物にや、

ほろほると食ふも」*発心集（衣の例、略）*俳諧・如行

子⑤雉子、山鳥などの鳴く声を表わす語。ほろろ。*源

賢集（1020頃）「御狩野に朝たつきじのほろほると鳴きつ

つぞふる身を恨みつつ」*永久百首（一一〇）春「あふ事

のかたのの雉妻恋にむべほろほるとたちる鳴らん（肥後）」

⑥砧を打つ音を表わす語。*歌謡・閑吟集

『蜻蛉日記』には、②に引かれている父倫寧が立ち去る場面

（上巻（五））の他に、もう一例、中巻・天祿二年（九七一）

四月一日長精進初日にも、次のような例がある。これも②であ

る。以下、仮名散文の本文等の引用は、『新全集』を用いる。

⑤ついたちの日、……とくしなさせたまひて、菩提かなへた

まへとぞ、行ふままに、涙ぞほろほるとこぼる。あはれ、

今様は、女も数珠ひきさげ、経ひきさげぬなし、と聞きし

時、あな、まさり顔な、……（『蜻蛉日記』中巻（二四）

また、『うつほ物語』の三例も、すべて②の落涙である。

⑥おとど涙をほろほると落としたまひて、「あはれ、……」

とのたまへば、忠こそ、「あやしうものたまふかな。何ご

とかはべるらむ」と聞こえて、涙をほろほるとこぼして、

立ちぬ。（『うつほ』忠こそ（一一））

⑦（正頼は）「あないみじや。……」と、ほろほろ泣きたま

ふ。

(同・国譲中(一二三))

その他の『枕草子』以前の「ほろほろ」の用例は、後述する和歌を含めて未見である。これらを見ると、むしろ②の用法が古いと言えるのではないか。『小学館古語大辞典』や『角川古語大辞典』のように、②①の順とするのが妥当であろう。②の例として、前者は『蜻蛉』上巻・天曆八年と⑥の後半を、後者は⑥の前半を引いている。「ほろほろ」とは、まず落涙表現だったのである(本節末尾の『源氏』の「こぼる」参照)。

岸上慎二氏校注『日本古典文学大系』(以下『古典大系』)は、「この語はその他、涙がこぼれる場合、物が裂け割れる場合、人が離散する場合などに用いられ、源氏物語にそれらの用例がある」と、『枕草子』注釈書の中で最も詳しい注を付けているが、「涙」の例が先行することを強調しておきたい。しかも、『枕草子』に影響を与えた両作品に複数用いられていた。

右の例をヒントの一つとして、『枕草子』では本来落涙の形容(擬態語)であった「ほろほろ」とを、落葉に対して用いたと考えられる。そして現代語訳するなら、『小学館古語大辞典』や『角川古語大辞典』が落葉の項で挙げている「はらはらと」(擬態語)が、落涙も兼ねていて最も相応しいのではないか。

(和歌の「ほろほろ」)

参考までに、歌言葉としての用例も見ておく。あまり多くは用いられず、主に散文の言葉であったようである。平安時代の例歌は、次の⑧の落涙(乾飯に喩えているので④でもある)を除くと、⑤の鳴き声に限られる。以下、歌番号は『新編国歌大

観』に拠るが、詞書・歌共に漢字は便宜的に増やした。

⑧ 旅づとに持たる乾飯のほろほろと涙ぞ落つる都思へば

(『久安百首』 羈旅・九九九・清輔^⑥)

⑤の例は『日国』が挙げる『源賢法眼集』四六番歌以外に、次の⑨や⑩がある。⑨は『方丈記』に似た表現があるが、伝承歌的であり行基の実作とは考えられない。⑩の作者赤染衛門(生年は九五七―九六四)は、満仲男で源信弟子の源賢(九七七―一〇二〇)よりも年上だが(『新編国歌大観』解説)、大原少将入道寂源の病が悪化して亡くなった(五二四―五二六詞書)のは万寿二年(一〇二四)なので、源賢没後の詠歌である。但しほぼ同時期であり、赤染衛門は和泉式部と共に清少納言との直接的な交友関係もあるので(『赤染衛門集』一五八、『和泉式部集』四九五・四九六)、⑩にも注目しておきたい(六節参照)。

⑨ 山鳥のほろほろと鳴く声聞けば父かと思ふ母かと思ふ

(『玉葉集』 釈教歌・二六二七・山鳥の鳴くを聞きて・行基)

⑩ 山深く住まふきぎすのほろほろと立ち居につけてものぞ悲しき

(『赤染衛門集』 五二五・重くなりまさり給とありしに、もののみあはれなるに、雉の立ち居せしに)

⑪ 春の野の繁き草葉の妻恋ひに飛び立つ雉のほろほろとぞ鳴く

(『古今集』 誹諧歌・一〇三三・題知らず・平貞文)

⑫ かりの世と思ふなるべし春の野の朝立つきぎすほろほろとぞ鳴く(『和泉式部統集』 一九三・絵に野辺に雉の立てる所)

『古今集』歌⑪の「ほろほろ」という雉の鳴き声も、⑫の和泉式部歌以外、あまり継承されていない。『古今集』の諸注は「ほ

ろほろ」を掛けると指摘するが、前述したように平安中期以前の例は未見である。しかし、少なくとも清少納言の同時代人の源賢や赤染衛門が「ほろほろ」の語を用いたのは、この語が⑩の「ほろろ」と音が類似しているだけでなく、何よりも人が「泣く」時の表現として定着していたから、と言えるだろう。

〔枕草子〕以後の落葉の「ほろほろ」と

『枕草子』以前には未見だが、以後には落葉の例が若干見られる。『小学館古語大辞典』は本段と⑮、『角川古語大辞典』には本段は見えず、⑭を例として挙げている。

⑬時雨うちして萩の上風もただならぬ夕暮れに、大宮の御方に内大臣参りたまひて、……大臣和琴ひき寄せたまひて、律の調べのなかないまめきたるを、さる上手の、乱れて掻い弾きたまへる、いとおもしろし。御前の梢ほろほろと残らぬに、……「風の力蓋し寡し」とうち誦じたまひて、
「琴の感ならねど、あやしくものあはれなる……」

〔源氏〕少女(一一一)

⑭秋の末つ方、……霧りふたがりて、道も見えぬしげ木の中を分けたまふに、いと荒ましき風の競ひに、ほろほろと落ち乱るる木の葉の露の散りかかるもいと冷ややかに、人やりならずいたく濡れたまひぬ。山おろしにたへぬ木の葉の露よりもあやなくもろきわが涙かな (同・橋姫(九))

⑮去年の秋ごろばかりに、清水に籠りてはべりしに、かたはらに、屏風ばかりを、ものはかなげに立てたる局の、……誰ならむと聞きはべりしに、明日出でなむとての夕つ方、

風いと荒らかに吹きて、木の葉ほろほろと、滝の方さまにくづれ、色濃きもみちなど、局の前にはひまなく散り敷きたるを、……「いとふ身はつれなきものを憂きことをあらしに散れる木の葉なりけり 風の前なる」

〔堤中納言物語〕このついで(一一)

⑯十月ついたちごろ、……風のさと吹きたるに、木々の梢、ほろほろと散り乱れて、御琴に降りかかりたるやうに散りおほひたる、折さへいみじきに、「ただ今思ひ知らむ人もがな。大臣渡りて……」(『寝覚物語』卷五(三四・三五))

『源氏』中の「ほろほろ」の多くは、前掲の②の賢木の例を含め、落葉表現であり(本節末尾参照)、⑭も「木の葉」と「露」と「涙」が融合している。さらに⑬も、⑭の「烈風」に対して「微風」の中の落葉であり、「涙」は明記されていないのだが、内大臣が落葉は自分の琴の力への感応ではないと言うために誦んじた『文選』卷四十六「豪士賦」序の対句に見える。

落葉は微風を俟ちて以て隕つ。而して風の力寡し。孟嘗雍門に遭ひて泣く。而れども琴の感は以て未だし。何となれば、隕ちんと欲するの葉は烈風に仮る所無く、まさに墜ちんとする泣は哀響を繁くするに足らざればなり。

『源氏』の落葉表現も、共に落葉と関わっているのである。

⑮の『堤中納言物語』は、『枕草子』一一六段「正月に寺に籠りたるは」の「清水などに詣でて」以下に、季節は異なるが舞台設定が似ている。⑯の『寝覚物語』は、「秋風楽」などの管絃の場面であり、大臣の訪問や「梢」の語が共通することか

らも、『源氏』少女卷⑬を踏まえているのだろう。

『枕草子』の「ほろほると」は、『源氏』のような心情の奥行きは無いが、落葉表現に用いた先駆性は看過できない。

こぼれ落つる

『枕草子』中、「こぼれ落つ」も、ここにしかない。

『日国』は、「こぼれる」の①の例に『伊勢物語』六十二段「涙のこぼるるに目も見えず、ものもいはれず」を挙げ、「こぼれおちる」の①に同じく八十七段「その石の上に走りかかる水は、小柑子、栗の大きさにてこぼれ落つ」を挙げている。後者の場では、知られるように「白玉（水滴）を「涙」に見立てる歌が詠まれた。さらに前掲⑤「蜻蛉」や⑥「うつほ」、後掲「枕草子」(d)等にも見られるように、「こぼる」はまず、「水」や「涙」が溢れ出る、溢れて落ちることを表わす語である。

但し、植物に用いた例も『枕草子』以前に無いわけではない。

⑬梅の花折ればこぼれぬ我が袖に匂ひ香移せ家づとにせむ

（『後撰集』春上・二八・題知らず・素性／『古今六帖』六・

梅・四一四二・素性・四句「匂ふ香」）

⑭浅緑野辺の霞は包めどもこぼれて匂ふ花桜かな（『寛平御

時后宮歌合』春歌・左・一一／『新撰万葉集』上・春歌・

五〇／『拾遺集』春・四〇・菅家万葉集の中・よみ人知ら

ず／『拾遺抄』二五／『古今六帖』五・緑・三五―四）

⑮誰がためか明日は残らん山桜こぼれて匂へ今日の形見に

（『元輔集』九・小野宮の大臣、月林寺に桜の花、見にま

かり侍りしに）

『日国』は、②の意味が「物があまつて外へ出る。はみ出る。あふれ出る。」で、③の「花や葉、砂など小さなものが落ち散る。」の例に⑭、④の「色があふれ出るように美しく照り映える。」の例に⑮を挙げている。『角川古語大辞典』は④を立てないため、②の例に⑮を挙げる。

⑯の元輔歌は、⑮と「桜」が「こぼれて匂ふ」点で共通するが（後藤祥子氏『元輔集注釈』に⑮を踏まえるところ）、「野辺の霞」のような何かから「こぼれる」のではない。初・二句からすると、④に加えて、落花の意味（③）も込められているのだろう。藤本一恵氏『清原元輔集全釈』の訳を引いておく。

「こぼれて美しく色映えておくれよ。」（以下略）

これら以外の歌では、「こぼる」はほとんど「涙」か「露」

に用いられていた。数少ない落花の例に元輔歌があることに、

留意しておきたい。元輔や河原院グループの和歌表現が『枕草

子』に取り込まれていることが、種々明らかにされている。

さらに、「うつほ」の「こぼる」「こぼす」は、「涙」の例が多

いが、「花」の例もある。但し、いずれも和歌である。

⑰月のおもしろき夜、源宰相、……御前の花盛り、色々の花

の蔭に立ち寄りたまひて、かくのたまふ。花盛り匂ひこぼ

るる木隠れもなほ鶯は鳴く鳴くぞ見る

（『うつほ』藤原の君〔九〕）

⑱右近中将同じき祐澄、「わづかなる藤」、松よりもはひこ

ばるるぞ藤の花今ひとしほの飽かず見ゆるは

(同・春日詣(梅の花筈) (二二))

②② 水の上に花散りて浮きたる洲浜に、「春を惜しむ」といふ題を書きて奉りたまふ。少将、水の上に花の錦のこぼるるは春の形見に人むすべとか (同・吹上・上 (二五))

『枕草子』そのものでは、「乗りこぼる」(二九段・二〇六段)を含め、「こぼる」は髪や装束など②の例が多いが、後掲(d)の「露はこぼるばかり」や、次のような「花」の例もある。

(c) 高欄のもとに青きかめの大きなるをすゑて、桜の、いみじうおもしろき枝の五尺ばかりなるを、いとおほくさしたれば、高欄の外まで咲きこぼれたる昼方、大納言殿(伊周)、桜の直衣の…… (二一段・清涼殿の丑寅の隅の)

しかし、落葉の例は本段のみである。『枕草子』以前にも、春の花に「こぼる」を用いた例はあり、中には「こぼれるように」ではなく落花そのものもあつたが(①⑦⑨②②)、『うつほ』を含めすべて歌であり、また秋の落葉の例は無いようである。つまり、『枕草子』は歌言葉の「花……こぼる」を散文に持ち込み、さらに秋の落葉にまで用いた点が新しいと言える。

『源氏』の「こぼる」

なお、『源氏』の「こぼる」には次の「山吹」の例がある。②③月の二十日あまりのころほひ、……まして池の水に影をうつしたる山吹、岸よりこぼれていみじき盛りなり。

(『源氏』胡蝶 (一一))

しかし、花はこの地の文の一例で、「髪」や「愛敬」も多いが、

やはり次のような落涙表現が最も多い。

涙―こぼれそむ 1例(帚木)

涙―こぼす 1例(空蟬)

涙―こぼる 13例(夕顔・葵2例・須磨2例・

濡標・薄雲・真木柱・梅枝・御法・幻・早蕨・宿木)

涙―こぼれいづ 1例(幻)

涙―ほろほると―こぼる 4例(賢木・真木柱・柏木・夕霧)

ほろほると―こぼれいづ 1例(須磨)

ほろほると―こぼす 1例(明石)

こぼれいづ 1例(宿木)

こぼれそむ 2例(宿木・蜻蛉)

玉水のこぼるるやう 1例(真木柱)

「涙」の語を伴わず「こぼる・こぼす・こぼれいづ・こぼれそむ」のみでも落涙を表わしていることが注目される。本段と同じ「こぼれ落つ」は無いが、柏木(一一)の「あまりにをさまらず乱れ落つる涙こそはしたなけれ」は、『古典大系』(三条西家本)では「こぼれ落つる涙」となっている。竹河(九)

には「桜」「山吹」の縁語的に用いられた「愛敬のこぼれ落ちたるやうに見ゆる」があるが、「涙」とは無縁である。ちなみに次も、数少ない「こぼれ・落つ」の例である。どちらの動詞も単独で落涙を表わすので、重ねる必要が無かつたか。

②④にはかなる御物詣では、いかに思つたつぞと御胸騒ぎて、(父大臣は)まづただ涙のみこぼれ落ちさせたまへば、

いとあはれなり

類纂本系統は「いとあはれにをかしけれ」である。しかし、ここも雑纂本の「いとあはれなり」が本来のものだと思われる。

『枕草子』は、初段の「鳥」の行りを初め、糞虫・薄・山鳥・蟋蟀・鶏などの木草鳥虫の姿に、親子の情愛や老人への同情や哀悼などの、素直な「あはれ」の思いを託す作品であることが知られている。本段もその一つと言える。

鈴木日出男氏校注・訳『日本の文学 古典編』（ほるぷ出版、以下『日本の文学』）は、本段（一九九段、『古典大系』に従い当該三文を一九八段「風は」から独立させる）に、「陰曆九月は晩秋。その『つごもり』は、秋の終わりの日、明日からは冬である。晩秋から初冬にかけて、古来、落葉に託して秋を惜しむ歌が多い。」と注する。次のような歌を指すのだろう。

②⑤秋山にもみつ木の葉の移りなば更にや秋を見まくほりせむ
（『万葉集』卷八・秋雑歌・一五二〇・旧一五一六・山部王、秋葉を惜しむ歌一首）

但し「いとあはれなり」は、「惜秋」であると共に、漢詩やそれに学んだ『古今集』以降の和歌の「悲秋」でもある。秋の「あはれ」の代表として黄葉（紅葉）や落葉が詠まれてきた。

②⑥善いかな 宋玉の言に曰く、悲しいかな秋の気たるや、颺瑟として草木揺落して変衰し、……

（『文選』卷十三・潘安仁・秋興賦所引『楚辞』九弁・宋玉）
②⑦帷を褰げて独り坐る辺亭の夕 榻を懸けて長く悲しぶ揺落

の秋（『懐風藻』八九・藤原宇合・在常陸贈倭判官留在京）

②⑧黄花興を助けて方に酒を携へ 紅葉愁を添へて正に階に満つ（『文集』卷六十五・三二八六・酬皇甫郎中对新菊見憶／『佳句』四時部・暮秋・一九八）

②⑨城柳官槐漫りに揺落 悲愁は到らず貴人の心（『文集』卷六十八・三四七一・早入皇城贈王留守僕射／『佳句』四時部・秋興・一六二／『朗詠集』上・秋・落葉・三〇八）

③⑩嵐に随ふ落葉は蕭瑟を含めり 石に濺く飛泉は雅琴を弄ぶ（『朗詠集』上・秋・落葉・三二三・順／『天徳闢詩略記』）

③⑪秋風にあへず散りぬるもみぢ葉のゆくへ定めぬ我ぞ悲しき（『古今集』秋歌下・二八六・題知らず・よみ人知らず）

③⑫秋山の嵐の声を聞く時に木の葉ならねど物ぞ悲しき（『拾遺集』秋・二〇七・題知らず・遍昭／『拾遺抄』一二八）

②⑬の「揺落」は、②⑦等の日本漢詩でも詠まれた。また②⑨の白詩は、②の「梧桐」と同様に、「柳」や「槐」という樹木名が示されていることにも、注目しておきたい（三節参照）。

黄なる葉どもの、ほろほるとこぼれ落つる、いとあはれなり。

以上見てきたことから、この文は、落花の「こぼる」の例歌を意識しつつ、『蜻蛉』や『うつほ』に例のある「涙」の縁語の「ほろほると」や「こぼる（こぼす）」「落つ」を用い、掛詞的に落涙のイメージと重ねて、新しい落葉表現を生み出したものと言える。詩歌の伝統においては落葉自体「あはれ」と言えるが、涙のように黄葉が散っていると捉えることで、述語の「いとあはれなり」が一層生きてくるのである。

地の文における和歌的技巧は、他に例えば次の掛詞があった。

(d) 九月ばかり夜一夜降り明かしつる雨の、今朝はやみて、朝日いとけざやかにさし出でたるに、前栽の露はこぼるばかり濡れかかりたるも、いとをかし。……すこし日たけぬれば、萩などの、いと重げなるに、露の落つるに、枝うち動きて、人も手触れぬに、ふと上さまへあがりたるも、いみじうをかし。と言ひたる事どもの、人の心には、つゆ(露)をかしからじと思ふこそ、またをかしけれ。(一二五段)

また後掲(k)の、造花と気づいた後に「すべて、花のほひなど、つゆまことにおとらず」とあり、後日「御前の桜、露に色はまさらで」と述べたのも、同じく掛詞的遊びかもしれない。

さらに当該文は、縁語・掛詞といった和歌的・伝統的的技巧に加えて、③の『礼記』月令「季秋之月……草木黄落」との対応や、「紅葉」ではなく「黄葉」と指定する点において、漢詩文の伝統との関わりもうかがえた。③を踏まえた次のような句も当時知られている。③④の「黄落」は、人事の衰貌の悲哀を伴っている。当該文は、本来春の色である「紅」ではなく「黄」である点でも、述語の「いとあはれなり」に直結するのである。

③ 秋風起こりて白雲飛び 草木黄落して雁南に帰る……簫鼓鳴りて棹歌発すれば 歡樂極まりて哀情多し 少壮幾時ぞ老いを奈何せん (『文選』卷四十五・武帝・秋風辞)

④ 紅葉黄落 一樹の春の色秋の声 綬を結び簪を抽づ 一身の壮なる心老の思ひ (『本朝文粹』卷五・為清慎公請致仕表・菅文時／『朗詠集』卷下・老人・七二五)

なお本段には、③④、さらに後掲②(②③④)の「蕭瑟」も) などのような聴覚表現は無く、視覚のみで描かれている。「風の音」は聞こえているのだろうが、言葉にはしていない。

さて、『日本の文学』は本段について次のように評している。また九月末から十月にかけて急激に変わろうとする風景もみごとに描かれている。「黄なる葉どものほろほるとこぼれ落つる」とは、いかにも写生的である。これは、秋の樹々の紅葉を絶賛した作中唯一の例としても注目される。

確かに「写生」や「観察眼の鋭さ」(次節「とく」の注、『国文学全史 平安朝篇』にも「描写の細密」「観察の鋭利」とあった)の指摘は首肯できる。これらの表現が生まれるためには不可欠なものであつただろう。但し、見て感じることと、それを表現することとの間には距離がある。いきなり言葉が生まれるわけではないのである。『枕草子』の言葉は、決して「折にふれて書き捨てたる」(同前)ものではない。本稿冒頭でも述べたが、表現史上に位置づけてこそ、独自の達成が明らかになると思われる。次節以降、他の二文についても同様の視点で見えていくが、その前に二点、当該文について補足しておきたい。

(散るもみぢや木の葉を落涙に見立てる歌)

「もみぢ」や「木の葉」を「涙」と重ねた表現は、実は『枕草子』以前から和歌にあつた。いずれも基本的に、「紅涙」(血涙)と「紅葉」の「色」の類似を前提として詠んだものである。なお、後掲⑦の伊勢歌は、紅涙が紅葉を色づかせる時雨に添えて「降る」ので「ふるさと」の紅葉の色が一層濃くなると詠ん

であり、「涙Ⅱ紅葉」ではなく、「涙Ⅱ雨」の例である。

③⑤唐衣たつたの山のみみぢ葉はもの思ふ人の涙なりけり

(『友則集』龍田の山を越えてよめる・二九)

③⑥神無月時雨に濡るるのみみぢ葉はただわび人の涙なりけり

(『忠岑集』一六五)

③⑦もみぢ葉に色見えわかず散るものは物思ふ秋の涙なりけり

(『伊勢集』長恨歌の屏風を亭子院の帝かかせ給ひて、その所々よませたまひける、帝の御になして・五二)

これらのうち③⑤③⑥は、本段のような散る紅葉ではない。また

③⑦の伊勢歌は、⑦⑤「長恨歌」を踏まえ(四節参照)、「散る」様

を詠んではいるが、「色見えわかず」とあるように「紅」の色

の共通性が眼目の歌であり、散り方に注目したものではない。

しかし「枕草子」の前後には、前掲⑭の薫の歌を含め、「紅」

を強調しない歌が見られるようになる。しかも、従来の「散る」

や「降る」もあるが、「落つ」も用いられている。

③⑧夕暮れに木繁き庭を眺めつつ木の葉と共に落つる涙か

(『義孝集』六・殿病み給ひし頃、いかかと人の問ひたる

に／『詞花集』雑下・三九六・一条撰政みまかりにける頃

よめる・少将義孝・初句「夕まぐれ」)

③⑨折しもあれ別れに落つる涙かなもみぢや秋の涙なるらん

(『嘉言集』一四九)

④⑩もみぢ葉や落つると思へど木枯らしの吹けば涙も止まらざ

ざりけり (『和泉式部統集』冬のはじめ・五二〇)

④⑪もみぢにも雨にも添ひてふるものは昔を恋ふる涙なりけり

(『公任集』五五七・嘆くこと侍りける頃、紅葉の散るを

見て／『定頼集』一一六／『新勅撰集』雑歌一・一一〇四)

④⑫木の葉散る嵐の風の吹く頃は涙さへこそ落ちまさりけれ

(『相模集』冬・五五四／『新勅撰集』雑歌一・一一〇三)

特に③⑧は、「木の葉Ⅱ涙」の見立てに加えて、「木繁き庭」が

本段の「木立おほかる所の庭」と類似している。作者義孝(九

五四―九七四)は行成の父で、元輔や順らとも交流があった。

また次の歌は、二二三段「細殿にびんなき人なむ」における定

子と清少納言の短連歌の本歌と見られる。「濡れ衣」と「三笠山」

の組み合わせ自体、これ以外にあまり無い(『清少納言集』八、『和

泉式部集』八三〇、『定頼集』一六〇)。よって、③⑨の本段への

直接的影響も考えられるところである。

④⑬怪しくも我が濡れ衣を着たるかな三笠の山を人に借られて

(『義孝集』一八・左衛門督の命婦のもとに、権中将と名

乗りて、宮のおはしたりと聞きてやる／『拾遺集』一一九

一・詞書略・藤原義孝／『実方集』二七七)

また④⑩の和泉式部歌も、「木枯らしの吹けば」は本段の「風

のいとさわがしく吹きて」に当り、注目される。

③⑧の詠歌年次は明らかに「枕草子」以前である。つまり、落

葉を見て「涙のようだ」と感じ、それを「紅」の語に拘らず自

由に詠み始めた時期に、本段が記された。よって「枕草子」の

独自性、これらの歌との違いは、見立て自体にあるのではなく、

『万葉集』的・漢詩文的な「黄なる葉」とすること、で、「紅涙」

との結びつきを完全に断ち、散る様子そのものに注目して、「こ

ほれ落つ」及び非歌言葉の「ほろほろと」を用いて言外に「涙」を暗示しつつ、散文で表現した点にあると言える。しかも、和歌のように作者が落涙の主体とはなっていない。

なお、④の作者相模（清少納言男橘則長の元妻）の歌について、西山秀人氏が『枕草子』の影響を種々指摘されている。

例えば、次と二八三段「十二月二十四日、宮の御仏名の」の段の描写である。④も、③⑧⑨のように先に「あはれ」の思いがあるのではなく、初冬に「嵐」が吹き落葉する様を見たことが落涙に結びつくという点が、本段と共通すると言えるだろう。

④東屋の軒の垂氷を見渡せばただ白銀を茸けるなりけり

（『相模集』二七七・走湯初度百首・はての冬）

（「ほろほろと」と「紛々」）

「ほろほろと」が本来落涙表現であったことを繰り返して述べてきたが、この語を落葉に用いた契機として、前述した「揺落」（②⑦⑨）の他に、「紛々」「繽紛」等の漢語（詩語）の存在もあつたのではないだろうか。例えば次のような表現もある。

④飄々として砌に依りて聚り 片々として堦を擁ぎて重る

遂に輕紅を滅たしむ 何ぞ碎錦を縫はしめむ

（『昔家文章』卷五・三七三・賦葉落庭柯空）

「飄々」は、躬恒が後掲⑤と同じ場で「紅葉飄々季日白」（『躬恒集』三二九）と用いている。歌には「散りぬべき紅葉」とあるが（三三〇）、④の「輕紅」からもわかるように、「ひるがへり落ちたる」（堺二〇〇段・前二〇六段）様であつて、「ほろほろとこぼれ落つ」とは若干異なる。疊語以外では、「飄落」

や「飄零」、「飄飄」（『本朝文粹』三二三）は「紅葉」の散る様、四〇二は「落花」などもある。

一方「紛々」は、意味だけでなく、次のような理由で「ほろほろと」との関係が最も強いと思われる。

イ、疊語であり、「ほろ」の反復の「ほろほろ」に似ている。ロ、落葉だけでなく落花・落涙・降雪の形容に用いられる。ハ、身近な作品、あるいは和漢兼作の作品に見られる。

以下、「紛々」の具体例を挙げておく。

まず『文集』では、人事の例が多い（〇〇二三・〇一九七・〇三一六・〇七二八・一〇六三・一三一一・一三六五・二二〇三・二二五一・二四一八・二四七四・二八〇一・三〇三七・三一八八・三三四八・三三七九）。但し『前集』では、降雪（〇四六・〇〇七六・〇二五一・〇六〇六・〇七〇二、三三四二のみ『後集』）と落花の形容にも用いられている。落花は、春（〇四八七・〇五〇二・〇五九三・〇七〇三・〇九一八）だけでなく、秋の例も、次の④⑦、卷九・〇四〇〇・翰林院中感秋懷王質夫「風夕花紛々」、卷十・〇五二三・秋槿「夕殞何紛々」の三例がある。しかし、落葉は④の一例のみである。

④夜深けて煙火尽き 霰雪白うして紛々たり

（『文集』卷二・秦中吟・〇〇七六・重賦）

④日暮れて涼風来たり 紛々として花叢に落つ

（同・卷八・〇三四八・秋蝶）

④紅葉紛々として欵瓦を蓋ひ 緑苔重々として壞垣を封ず

（同・卷十二・〇五八二・江南遇天宝落叟）

もちろん『文集』以前にも、次のような例があり（他に落花・舞・降雪各一例）、廬照隣以下、初唐・盛唐の詩人達も落葉の形容に用いているが、平安の詩歌に最も影響した『文集』に少ないことは注目すべきであろう（『文選』にも落葉は無い）。

④ 況や復た飛螢の夜 木葉乱れて紛々たるをや（『玉台新詠』 卷四・雜詩五首・王元長・其一古意二首・霜氣下孟津）

『佳句』は、落花二例と、降雪二例（草木部・竹・六三〇・白・李次虚窓竹、別離部・水行・九六三・曹叡・過洞庭湖）があった。

⑤ 紛々として花落ちて門空しく閉ぢ 寂々として鶯鳴いて日更に遅し（『佳句』四時部・暮春・九六・劉長卿・題楮少尉府湖上望亭、劉長卿は落葉「紛々」の例が六例と特に多い）

⑥ 酒盞把る時には須く満々たる 花枝攀づる処落（欲）つる

こと紛々たり（同・草木部・花宴・六七六・白・花下自勸酒／『文集』卷十三・〇七〇三・花下自勸酒「酒盞酌来須満々 花枝看即花落紛々」）

これらを見る限りでは、落葉は例外的で、「紛々」は降雪と落花の形容とされていたことがわかる。前述したように、落花は前掲⑦の「折ればこほれぬ」のように「こほる」で表現されることもあり、また降雪についても、次のような例があった。

⑧ 雪こほすがごとふりて、ひねもすにやまず。……目離れせぬ雪の積るぞわが心なる（『伊勢物語』八十五段）

つまり、「紛々」が落花や降雪の表現であるということとは、「こほる」「こほす」の語と親和的だと言える。

さて日本漢詩文でも、降雪の例は散見する。例えば、『凌雲集』

藤原道雄・詠雪「紛々白雪従千里」、『文華秀麗集』下・一二六・奉和翫春雪・藤原冬嗣「春雪紛々降九天」、『菅家後集』四九〇・雪夜思家竹「紛々專夜雪」、『柳絮』や「花」の見立てでは、『菅家文章』卷五・三九四・柳絮「春雪紛々繞柳枝」、『本朝文粹』卷十・二九六・源順・三月三日於西宮池亭同賦花開已匝樹應教「未見紛々辞染之雪」などがある。

古記録でも、「紛々」は降雪表現として『後一条師通記』¹²²や『中右記』で多用されているが、『枕草子』以前で管見に入ったのは『小右記』正暦四年（九九三）三月二十二日条「夢想紛々」の人事の例のみである。後の例だが、『中右記』永長元年（一〇九六）三月一日条「庭桜紛々、岸柳衣々」も注目される。

『枕草子』以前の日本の落花の例としては、次が明確である。

⑨ 時に紫藤の花院に満ち 黄鳥の声窓に入る 紛々として乱れ落ち 梢雲を媚景の晴に飛び……（『本朝文粹』卷十一・三三二・源順・三月尽日遊五覚院同賦紫藤花落鳥関関）

また、『菅家文章』卷二・一五〇・七月七日憶野州安別駕「満庭香粉幾紛々」は花が「こほれて匂ふ」様であり、『本朝文粹』卷十・三〇一・源順・暮春於浄閻梨洞房同賦花光水上浮「紛々照流」は「水」の上に既に散った、「花」の例である。『本朝麗藻』卷上・春・二七・花落春帰路・儀同三司「花落紛々雲路深」も散った花だが、作者が注目される（c）参照。さらに同・六・林花落灑舟・江以言「紛々散灑灑舟中」や、同・一九・度水落花舞・橘為義「紛々渡水舞猶輕」は、花の散っている様である。落葉の例は、『文集』に一例しか無かったが（もちろんこの

一例④が重要であろう)、日本漢詩文では散見する。

まず、『文華秀麗集』下・一一〇・和巨識春日四詠・御製・舞蝶「雑色紛々花樹中」は蝶の飛ぶ様子だが、彼らは「落葉」は「蝶」や「舟」に似ていると見ていたので(同・一四〇・神仙苑九日落葉篇応製・巨勢識人)、以下の例に近いと言える。

⑤4 寂々にして独り傷む四運の促まることを 紛々なる落葉看るに勝へず

(『文華秀麗集』巻中・述懐・五〇・述晚秋懐・姫大伴氏)

⑤5 日暮らしに秋の野山を分け来れば心にもあらぬ錦をぞ着る
終日遊人山に入る 紛々たる葉錦衣菱々たり……

(『新撰万葉集』上・秋歌・一一一と一一二)

⑤6 暮秋遊覽日將に西れんとし 紅葉紛々として路誘引……

もみぢ葉の風のまにまに散る時は見る人さへぞしづ心無き
(『躬恒集』晚秋遊覽、同賦秋景引閑行、各分一字・谿・三三七と三三八・左衛門尉〈藤原治方〉)

⑤7 観るに夫れ五更霜白く万条紅 紛々として分飛し燕脂を砌

上に点じ 索々として灑落し蜀錦を枝中に展ぶ (『本朝文粹』巻十・後江相公〈朝綱〉・初冬翫紅葉、応太上法皇製)

落葉そのものに「紛々」を用いた例が、女性の詩や和漢兼作の場に見られることに、注目しておきたい。

⑤6の「紛々」について、藤岡忠美氏・徳原茂実氏『躬恒集注』は「紅葉が盛んに乱れ散るさま」とし、渡辺秀夫氏は「ちりまがひ」と訓んで、白詩④ないし晩春の山躑躅をよんだ「日西風起紅紛々」(巻十一・〇五九三・山石榴寄元九)に拠ると

される。④など前掲の秋の落花三例の存在も看過できない。

さらに渡辺氏は、⑤6の末句は「澗底の松」(『文選』、『文集』巻四・〇一五一)を踏まえるが、道義的倫理的寓意は希薄化されておき、和歌のほうは紀友則の『古今集』八四番歌を本歌とした「散り行く紅葉を桜の落花になぞらえた替え歌」であり、「惜春を惜秋に置き換えたもの」であると言われている。置換は、『文集』においては落花表現のほうが優勢な「紛々」を、落葉表現として用いたことについても言えるだろう。「錦」の見立てや「尽日」など、中国の詩文における春の季節美やそれを愛でる表現が、日本の詩歌ではむしろ秋に用いられていく中に、落葉の「紛々」も位置づけられるのではないか。

さらに、次の落涙の例にも注目しておきたい。「卞和の玉」(『韓非子』「蒙求」)の血涙の故事を引き、落涙を散る「玉」に見立てた詩である。「紛々」は「涙」とも結びつくのである。

ちなみに『菅家文草』巻二・九九・九日侍宴各分一字応製「舞舞紛々白玉墀」は、玉石が多いだけで散るわけではない。

⑤8 片糸に貫く玉の緒を弱み乱れて恋は人や知りなむ

誰か識る中心の恋の緒の纏を 卞和泣く処玉紛々……

(『新撰万葉集』上・恋歌・二二三と二二四)

なお、同じく降雪表現の「繽紛」(『文選』巻十三・謝惠連・雪賦)が、『新撰万葉集』八八「白露繽紛乱玉飛」や、一三六「落葉繽紛客袖爛」にあり、紀齊名「落葉賦」(『本朝文粹』巻一・八)等々にも見えるが、豊語ではないので、やはり「紛々」のほうが、より「ほろほろ」とは近いと言えるだろう。

さて、⑤の詩歌は「惜春」の「惜秋」への置き換えであったが、本段に描かれた、木の葉が「ほろほろ（紛々）」と、涙のように、花のように、「こぼれ落つる」光景も、次文の「桜」を待つまでもなく、惜春の光景と重なり合うのではないか。

三、「桜の葉、棕の葉こそ、いととくは落つれ。」

桜の葉、棕の葉こそ

樹木名が、白詩②の「梧桐」や②⑨の「柳・槐」などと同様に、具体的に述べられている箇所だが、堺本と前田家本は「棕の葉」が無く、「桜の葉」のみである。

「棕」「棕の木」「棕の葉」は、増田繁夫氏校注『和泉古典叢書』が「本草和名」を、萩谷氏が『和名抄』を引いて注するよ
うに、研磨材として用いられた。文学作品ではほとんど見られない。それが、類纂本には無い一因かもしれない。

『小学館古語大辞典』や『日国』などの辞書類が挙げる『枕草子』に近い時期の例としては、⑤⑨がある。『角川古語大辞典』は『無名抄』の「俊頼朝臣感じて云、これは棕の葉磨きして、鼻脂引きたる歌なり」という表現を磨くのを挙げている。

⑤御堂の内を見れば、仏の御座造り輝かす。板敷きを見れば、木賊、棕葉、桃の核などして、四五十人が手ごとに居並みて磨き拭ふ。
(『栄花物語』巻十五・うたがひ(九))

「桜の葉」もまた、文学作品に一般的とは言えないものである。『枕草子』では、「さて春ごとに咲くとて、桜をよるしう思ふ人やはある」(三七段・節は)や、「(橘は)朝露に濡れたる

あさばらけの桜におとらず」(三五段・木の花は)などのように、桜花の通念的な美を認める一方で、次のような独特な取り上げ方もしていることが知られている。

(e) 木の花は、濃きも薄きも紅梅。桜は、花びら大きに、葉の色濃きが、枝細くて咲きたる。…… (三五段)

(f) 大きにてよきもの……山吹の花。桜の花びら。(二一九段)

「桜」は、遠景だけとは言えないが、「白雲」「霞」「滝」「雪」「波」等に見立てられるなど、「雨」や「露」に濡れた様や落花も含めて、総体的に捉えられるのが一般的であり、花びらの大きさや、葉の色、枝の細さといった微細な視点で取り上げられるのは珍しい。⑥のような例もあるが、「花びら」の大きさを重視するのが当時一般的であったとは言えないだろう。

⑥またの日、宰相の君、里より花びら大きな桜を瓶に挿して
(『大斎院前御集』三二六詞書)

また桜の「葉」は、夏の青葉、葉桜として以下のように和歌にも詠まれるが、落花と同様に総体的に取り上げられ、花を惜しむ延長線上で取り上げられている。秋のみみぢではない。

⑥①夏山の青葉まじりの遅桜初花よりもめづらしきかな

(『金葉集』二度本・夏部・九五・二条関白の家にて人々に余花の心をよませ侍りけるによめる・藤原盛房)

⑥②今日もまた散りにけらしな桜花明日は青葉に成りや果てなん
(『和歌一字抄』上・漸・三〇九・花漸少・実行卿)

⑥③梢には葉のみ茂りて桜花庭の面こそ盛りなりけれ
(同・上・落・四四六・花落枝緑・良暹法師/同・緑・四七八・同)

④桜花青葉の中に散り残る梢や春のとまりなるらん

(同・下・纒・九二四・花纒残・顯季卿)

『枕草子』中のもみぢの特異さ

そもそも『枕草子』は、紅葉(黄葉)の記事が少ないと言われている。前掲『日本の文学』の本段の評に、「秋の樹々の紅葉を絶賛した作中唯一の例」とあつた通りである。

(g)花の木ならぬは 楓。桂。五葉。たそばの木、しななき心地すれど、花の木ども散りはてて、おしなべて緑になりたる中に、時もわかず、濃き紅葉のつやめきて、思ひもかけぬ青葉の中よりさし出でたる、めづらし。……楓の木、ささやかなるに、もえ出でたる葉末の赤みて、同じ方にひろごろたる葉のさま、花もいともはかなげに、虫などの枯れたるに似てをかし。……譲り葉の……紅葉せむ世や」と言ひたるものし。…… (三八段)

(h)職の御曹司におはしますころ、西の廂に……「男山の峰のもみぢ葉、さぞ名は立つや、さぞ名は立つや」。(八三段)

(i)平野は……斎垣に蔦などのいと多くかかちて、紅葉の色々ありしも、「秋にはあへず」と、貫之が歌思ひ出でられて、つくづくと久しうこそ立てられしか。(二六九段・神は)

(h)の「(た)そばの木」(カナメモチ)は常緑で、その夏の赤い葉の例は、『和泉古典叢書』が次を指摘している。

⑥大夫、そばの紅葉のうち混じりたる枝につけて、例のころにやる。(『蜻蛉日記』下巻「一〇」・天禄三年六月)

(g)には紅葉の代表である「楓」も見えるが、具体的に言及し

ているのは、秋の紅葉ではなく、新緑の「赤い葉である。常緑樹の「譲り葉」は、ありえないことの例として紅葉を詠んだ和歌が引かれている。(h)は「雪山」の段に登場する乞食尼の常陸の介が歌った猥歌の一節にすぎない。

(i)が唯一秋の紅葉(黄葉)の描写であるが、次の「葛」の歌を引用したもので、木の葉ではなく「蔦」である。

⑥ちはやぶる神の斎垣に這ふ蔦も秋にはあへず移ろひにけり (『古今集』秋歌下・二六二・詞書略・貫之ノ『古今六帖』六・三八八・葛・貫之)

このように、一般的な総称としての「もみぢ」や、詩歌に多い「楓」「萩」や「梧桐」「柳」「槐」などの秋の紅葉・黄葉の実景は見られず、「葛」の紅葉はあるが落葉ではなかった。

つまり、秋の木の葉の「紅葉(黄葉)」、そしてその落葉は確かに本段のみであり、しかも、秋ではなく春を代表する「桜」や、実用的な「棕」を取り上げた点が、独特だと言える。

いとくは落つれ

さらに述語も独特である。能因本のみ「いとく」が無いが、堺本や前田家本にもあり、能因本の脱落だと思われる。

「とく」は、諸注釈が次のように訳している。なお、『和泉古典叢書』と『新日本文学大系』はここに注が無く、『角川鑑賞日本古典文学』『枕草子大事典』は「風は」段自体が無い。

はやく …… 『古典大系』

早く …… 『全講枕草子』『旺文社文庫』『講談社学術文庫』

『堺本枕草子評釈』『枕冊子新註』

早々と……『角川文庫(新版)』『集成』『枕草子解環』

早くから……『新全集』

すばやく……『日本の文学』

『日本の文学』も、「開花・落花に遅速の差があるのと同様、落葉にも、それが認められることをさりげなく述べて、観察眼の鋭さを印象づけている」からすると、やはり時期的な早さである。「集成」には「桜や棕の葉は、ほとんど立秋間もなく散り始める。」とある。「とく」は時期だけなのだろうか。

「枕草子」中の「とく」は、ほとんどが日記的章段にあり、開花期も一例見られる。これは咲いた時期が早い意である。

(j) 桜の一丈ばかりにていみじう咲きたるやうにて、御階のもとにあれば、「いととく咲きにけるかな。梅こそただいまは盛りなれ」と見ゆるは、作りたるなりけり。すべて、花のほひなど、つゆまことにおとらず。

(二六〇段・関白殿、二月二十一日に、法興院の) しかし、催促に用いられることが多く、特に「草の庵」の段(七八段・頭の中將のすずろなるそら言を聞きて)の多用が目立つ。次の有名な縫い物競争も、速くかつ早くである。

(k) 南の院におはしますころ、……誰かとく縫ふとと、近く向かはず縫ふさまもいと物ぐるほし。(九一段・ねたきもの) また、次は既に牛車を走らせている場面なので、早く発車せよの意ではなく、一層速度を上げよの意と考えられる。

(1) 五月の御精進のほど、……「待つべきにもあらず」とて、走らせて土御門さまへやるに、……「とくやれ」と、いと

ど急がして、土御門に行き着きぬるにぞ、……(九五段)

このような速度の例もあることや、前文でも「風」が激しく吹いて「ほろほろとこぼれ落つる」という落ち方に注目していることから、「いととく」も落下速度と考える余地がある。そもそも「九月つごもり、十月の頃」という限られた期間内において、時期的に「いととく」と言うのは、やや不自然である。ちなみに、『枕草紙抄』は本文に「とく」が無いので「此二色軽く落る物なり」とする。落ち方の問題と捉えているのである。但し、実態としては桜類は他よりは落葉の時期が早い。

しかも、山桜は葉が出る時に徐々に出る「順次型」ではなく一気に出る「一斉型」であり、「一斉開葉」と「一斉落葉」は結びついていることが多く、散り始めると一気に(一斉に)散ってしまう。その意味でも「とく」なのである。

よって、「早くから」という訳にやや問題があることは確かであり、完了も早いことを含めて、諸注の訳の中では「すばやく」「早々と」がより相応しいと言える。さらに「すばやく」や「急いで」なら、早期・一斉(一気)・落下速度の速さ、の三つを込めることができよう。表現に即して読むと、「とく」が三つ目の速さの可能性もあることを、再度述べておく。

ちなみに⑥7は、早く紅葉狩りに行くべきだ(った)という歌だが、落葉と「とく」の語とが結びついた例歌は僅かである。

⑥7 後ろめたくとと急がでもみぢ葉は戸無瀬の滝の落ちもこそすれ(『赤染衛門集』五七〇・紅葉見に戸無瀬に行かむと契りし人の、音もせざりければ)

⑥8 早来ても見てましものを山背の多賀の槻群散りにけるかも

(『万葉集』 卷三・雑歌・高市連黒人羈旅歌八首・二八〇)

・旧二七七ノ『五代集歌枕』等では初句「とく来ても」

四、木の葉の散り敷く初冬の「庭」

十月ばかりに木立おほかる所の庭は、いとめでたし。

この文は三巻本と能因本が全く同じである。堺本・前田家本の「おほかた(の)、そのころ」も、落葉しつつある時期ではなく、もう少し後の「十月ばかりに」に当たると考えてよからう。

最初の文が、落涙に重ねて晩秋の黄落に「あはれ」を感じていたのに対し、この文は木の葉が散り敷く初冬の「庭」の視覚的な興趣を述べている。悲哀感は見当たらない。しかし、「水」に散ったものは別として、散り敷いたもみぢが早くから愛でられていたわけではない。「枕草子」の表現の特徴を明らかにするために、前後の散ったもみぢの表現、主に和歌を見ておく。

(九〇〇年前後の宿や道に散ったもみぢ、孤独の表象)

散る前のもみぢ、散りゆくもみぢ、散ったもみぢ、の三段階のうち、二つ目は本段を含め多く悲哀感を伴うが(「幣」「錦を裁つ」などの見立ては別)、三つ目も『古今集』においては同様であった。

⑥9 奥山にもみぢ踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき

(『古今集』 秋歌上・是貞親王家の歌合の歌・よみ人知らず)

右は「山」のもみぢである。これとは別に、西暦九〇〇年前後の詩歌において、「人の訪れの無いこと」の表象」として、

もみぢが「道」や「宿」に降り積もる様が詠まれるようになった。三木雅博氏は、『伊勢物語』九十六段の「かへでの初紅葉」

につけて贈った歌も含め、⑦5の「長恨歌」や前掲②のような白詩を、直接・間接に学んだ結果だと推定されている⁴⁹⁾。

⑦0 門扇して人到らず 橋破れて馬過ぎる事無し……寒声は階の落葉 暁気は砌の霜花

(『菅家文草』 卷五・三六〇・假中書懷詩)

⑦1 紅葉門深く行跡絶え 四壁の虚中辛苦多し

(『本朝文粹』 卷一・一八・紀納言〈長谷雄〉・貧女吟)

⑦2 寂寞たる山家秋晩の暉き 門前の紅葉掃ふ人稀なり

(同・卷一・紀納言・二九・山家秋歌・八首の第八)

⑦3 秋は来ぬ紅葉は宿に降り敷きぬ道踏み分けて訪ふ人は無し (『古今集』 秋歌下・二八七・題知らず・よみ人知らず)

⑦4 踏み分けてさらにやとはむ紅葉葉の散り隠してし道と見ながら (同・二八八・同)

⑦5 春風桃李花の開く日 秋雨梧桐葉の落つる時 西宮南苑秋

草多し 落葉階に満ち紅掃はず (『文集』 卷十二・〇五九 六・長恨歌)

さらに⑦5は、『伊勢集』「長恨歌の屏風」の歌(五二・五六、前掲③と後掲④)だけでなく、「柿」と一層赤い「ねずみもち」の紅葉に付けた冒頭の贈答歌でも踏まえられているという。

⑦6 人住まず荒れたる宿を来て見れば今ぞ木の葉は錦織りける (『伊勢集』 一ノ『後撰集』 冬・四五八・住まぬ家にまで来て紅葉に書きて言ひつかはしける・枇杷左大臣〈仲平〉)

⑦ 涙さへ時雨にそひてふるさとは紅葉の色も濃さまさりけり
(同・二／同・四五九・返し・伊勢／『古今六帖』一・天
・時雨・五〇八)

次は、その孤独の表象に「虫」の聲が添えられた例と言える。
⑦⑧もみぢ葉の散りて積もれる我が宿に誰をまつ虫こころなく
らむ

(『古今集』秋歌上・二〇三・題知らず・よみ人知らず)
(山や林に散ったもみぢ、錦を敷く・錦を織り敷く)

しかし『後撰集』になると、散り敷いたもみぢと孤独とを結びつけず、愛でた歌が見える。しかも、散る前の状態や水上・水底に散ったもみぢではなく、主に「山」や「林」に散り敷いたもみぢを「錦」に見立てている。動詞は、右の⑦⑧仲平歌では「錦織る」であったが、こちらの場合は「錦敷く」が多い。⑦⑧の『古今集』よみ人知らず歌などにも「降り敷く(頻く)」が用いられていたが、「錦」は詠みこまれていなかった。

⑦⑨ 立ち寄りて見るべき人のあればこそ秋の林に錦敷くらめ
(『後撰集』秋下・四〇八・題知らず・よみ人知らず)

⑧⑩ 木のもとに織らぬ錦の積もれるは雲の林の紅葉なりけり
(同・四〇九・題知らず・よみ人知らず)

⑧⑪ 秋風に散るもみぢ葉は女郎花宿に織り敷く錦なりけり
(同・四一〇・題知らず・よみ人知らず／『古今六帖』六・
錦・三五二六・貫之・四句「織りきる」)

⑧⑫ もみぢ葉の降り敷く秋の山辺こそたちて悔しき錦なりけれ
(同・四一一・題知らず・よみ人知らず)

特に⑧⑪は、「女郎花」を「錦」に見立てて(『貫之集』三五六も同様)、かつ「もみぢ」も「錦」に見立てた歌で、⑦⑧の仲平歌と同じく「織り」の語もあり、「山」や「林」ではなく「宿」に散ったもみぢであるが、悲哀感は無い。しかし「庭」の語はまだ用いられておらず、過渡的、先駆的と言える。
なお、『後撰集』時代の例歌として次も挙げられるが、散り敷いたもみぢとは限らないようである。

⑧⑬ ひとりのみ逢の宿に臥すよりは錦織り敷く山辺にを居む
(『うつほ』菊の宴「三六」、中将仲忠の歌)
(庭に散ったもみぢ、掃かないのは人がいないから)

ここまでに挙げた歌には、「宿」や「道」を含むものはあったが、明確に「庭」に散ったもみぢの歌は無かった。しかし、伊勢は「長恨歌」を踏まえて、③⑦と共に、次のようにも詠んでいた。漢詩文が契機となつて「庭」がもみぢの歌にも導入されたのである。但し「長恨歌」には③⑦以外にも「庭」の語は無く、前掲②の白詩「秋庭掃はず藤杖を携へて 閑かに梧桐の黄葉を踏みて行く」などに拠るのである。

⑧⑭ 紅に掃はぬ庭になりけり悲しきことの葉のみ積もりて
(『伊勢集』長恨歌の屏風を亭子院の帝かかせ給ひて、その所々詠ませ給ひける、帝の御になして・五六)

これを踏まえた歌に次がある。連作の中の一詩で(「額に」)、人が訪れないことも詠み込んでいる。なお、題の詩句は「枕草子」六三段「草は」の「あやふ草」の条でも引かれていた。

⑧⑮ 庭の間も見えず散り積む木の葉屑掃かでも誰の人か来てみむ

(『和泉式部集』 親身岸額離根草、論命……二一八〇)

これらは、前々項の「孤独」の表象の系譜である。

(庭に散ったもみぢ、掃かないのは愛でるため)

一方、伊勢歌と同じ頃に、「孤独」の悲哀感を伴わない「庭」に散ったもみぢの歌も詠まれ始め、平安中期以降継承された。

⑧⑥ 洞中には清浅たり瑠璃の水 庭上には蕭条たり錦繡の林

(『朗詠集』 上・秋・紅葉・三〇三・保胤)

⑧⑦ 庭の面に唐紅になるまでに秋にあひかね落つる紅葉か

(『躬恒集』 一五・亭子の帝の大井におはしませる時に、

九つの題の歌・紅葉落つ／『書陵部本躬恒集』二〇一)

⑧⑦は、延喜七年九月十日宇多院大井河行幸という和漢兼作の場での詠歌である。「水上」と「水の面」(『古今集』八四五・篁、

九七六・躬恒等)の関係のように、「庭上」などの漢語に拠り、躬恒は「庭の面」を用いたのであろう(『古今集』一〇〇五も)。

「秋にあひかね……」などから、散ったもみぢを愛でた歌とは言い切れないが、少なくとも⑧④や⑧⑤のような作者の「孤独の表象」として「庭」のもみぢを詠んではない。過渡的な歌と言えるが、次の⑧⑧になると悲哀感は全く無くなる。

⑧⑧ 落ち積もる庭の紅葉は唐錦まづしくものは無しとこそ聞け

(『寛和二年内裏歌合』 冬・紅葉・左・二九・敦信)

この歌合は、二節で取り上げた⑧⑧の義孝の歌の後、讓位十三日前の寛和二年(九八六)六月十日、花山天皇の主催で、義懐の判、歌人は左が能宣・斉信・明理・長能・好忠・敦信、右が惟成・実方・道綱・公任・道長、本文によっては高遠もいたと

され(『新編国歌大観』解説)、「枕草子」と関係の深い人々が関わっていた。作者藤原敦信は明衡の父で、敦良親王読書始に「文人」として詩を賦した(『平安時代史事典』)。やはり漢文学的背景で「庭」の語が使用されたわけである。前々項で述べた「錦敷く」もあり、完全に賞美の歌である。

なお鈴木宏子氏は、例外的な桜Ⅱ「錦」の見立てとして、次の歌を紹介されている。⁶⁰「庭」に散り敷く落花を愛でた歌である。『古今集』八六四番歌を踏まえ、「錦」の縁語「裁つ」があつてこそ、「歌のことばの中に安定した地位を得ている」という。

ここでは、これが元輔の歌であることに注目しておきたい。前掲⑧⑨の「こぼる」と同じく、元輔の落花の歌の言葉や光景が、「枕草子」で落葉に置き換えられているのである。

⑧⑨ 花の蔭たたまく惜しき今宵かな錦をさらす庭と見えつつ

(『元輔集』 九二・桜の花敷けること散る所に／『後拾遺

集』 春下・一三九・花の庭に散りて侍りける所にてよめる)

さて、⑧⑧と同様の表現が「源氏」の地の文⑧⑩にもあり(波線部については後述)、以後、「風」の有無の違いはあるが、「庭に錦を敷く」が継承され、例歌が散見する(他に「宿に錦を敷く」という表現もある)。⑧⑩は孤独感もうかがえるが、紅葉を愛でていることには変わりがない。

⑧⑩ 神無月の二十日あまりのほどに、六条院に行幸あり。……

道のほどの反橋、渡殿には錦を敷き、……夕風の吹き敷く紅葉のいろいろ濃き薄き、錦を敷きたる渡殿の上見えまがふ庭の面に、……帝、世のつねの紅葉とや見るいにしへの

ためしにひける庭の錦を（『源氏』藤裏葉（一五・一六））

⑨もみぢ葉の積もれる庭に降りしけばただ霰地の錦とぞ見る
（『道命阿闍梨集』四二・紅葉散りたる庭に、霰の降り混じりたるに）

⑩初時雨そめし紅葉の唐錦庭にうちはふ風ぞ敷くめる

（『教長集』秋歌・四九三・落葉歌とてよめる）

⑪見る人もあらじや宿の庭の面にあたら紅葉の錦敷くらん
（同・四九四）

また以下の例は、②と同じく「庭を掃かない」ことが詠みこまれているが、それは落葉を愛でるためである。動詞は「掃く」の縁語で「散り（塵）積もる」が多い。⑩の作者道済は漢詩人でもあり、和泉式部と同様に、『枕草子』との関係が種々明らかにされている河原院グループの第二世代である。

⑫散り積もる紅葉を惜しむとせしほどに庭も掃はで秋過ぎにけり
（『道済集』二六・紅葉の積もる家）

⑬紅葉葉を夜半の風の吹く庭は物忘れせで朝清めすな

（『永久百首』落葉・三六九・仲実）

⑭梢にて飽かざりしかば紅葉葉の散り敷く庭を掃はでぞ見る
（『詞花集』冬・家に歌合し侍りけるに落葉をよめる・一四二・大式資通）

⑮紅葉葉の散り積む庭も見るべきに夜半の風の吹き掃ふかな
（『田多民治集』八八）

右のうち⑮は、『拾遺集』一〇五五番（『拾遺抄』三九七／『公忠集』五／『朗詠集』一三三二）の落花の歌を踏まえている。落

葉を愛でる心象は、やはり落花のそれを連想させるのである。

次は、これらの心象を明確に対比させた歌である。

⑯花散りし庭に紅葉の積もれるをいづれ優りて惜しと見えけむ
（『赤染衛門集』四九七・春、花見し山寺を見れば、庭に紅葉の散り積もりたるを）

……十月ばかりに木立おほかる所の庭は、いとめでたし。

本段は、『古今集』には無く『後撰集』で注目されるようになった地面に散り敷いたもみぢの美を、やはり漢詩的表現を取り込んでみぢの和歌でも詠まれ始めた「庭」の語を用いて、同時代和歌と同様の新しい興味を表現したわけである。⑯の元輔の「庭」の落花の「錦」を愛でる歌をヒントにした可能性があるが、「錦」の語は用いていない。もちろん、詞書を含め散文では「庭」の語自体は用いられていたが、その語を用いて散り敷く木の葉の美を散文で描いたことが新しいのである。このような描写は、『蜻蛉日記』や『うつほ』にも無かった。

また本段には「掃ふ」の語は無いが、第一文の「黄なる葉」、第二文に具体的な「桜」と「棕」という木の名がある点で、②の閑適の白詩句に近い。「佳句」所収であることから、作者がこの詩句を知っていた可能性は高く、直接的な影響が考えられる。なお前述したように、⑳の義孝歌も非常によく似ていた。

また二節末でも述べたが、㉑の赤染衛門歌の春秋優劣論ほど明らかではないが、落花との対比は、「桜」を提示した本段においても読み取り得るのではないか。読者は前文の「桜……落つれ」から、春の終わりの「桜」の散り敷いた「庭」の「めで

た」さを連想したのであろう。最初の文の「ほろほろ」「紛々」「こぼる」は、落涙と共に落花を表わす言葉でもあった。

なお、⑨の『源氏』藤裏葉には、「風」によって「庭」に「錦を敷く」様が描かれていたが、同巻については第一節で紹介したように、本段冒頭近くの「三月ばかりの夕暮に、ゆるく吹きたる雨風。」との関係が注目されてきた。前述した「ほろほろ」との使用も含め、『枕草子』が描いた「風」を『源氏』が展開させたのは、「野分」だけでは無さそうである。また、この文に鈴木美弥氏は「惜春の情」を見出されたが、末尾三文には、その情と対照的に、また重ねて、「惜秋の情」が表現されていた。その意味でも、ほとんどの注釈書が認めているように、「風は」という一連の文章と見るべきだろう。

(錦を張る)

最後に、堺本・前田家本のみにある「錦を張れる」という見立てを取り上げておきたい。これは、平安末期以降に付加されたものと考えられる。共に、次段に晩秋・初冬に続く季節の「しも月のついたちころに」で始まる「風」に関する随想章段も加えている。「読書行為」による創作的受容の一つと言えよう。

『枕冊子新註』は「出典未考。後のもの」として、⑨を挙げている。季経は清輔の異母弟で、散逸した『枕草子』の最古の注釈書を著したことでも知られている(『本朝書籍目録』)。

⑨しづえまでかかれる蔦はもみちして錦をはるは和田の笠松
木抄 六〇三三／『歌枕名寄』四三七八

『枕草子』以前の例も、『万葉集』歌を含め僅かだがある。そのうち、⑩は春秋両方(花ともみち)の「山」、⑪は秋の「野辺」、⑫は春の「野辺」、⑬も春で、春が優勢と言えよう。

⑩山の辺の五十師の御井はおのづから成れる錦を張れる(錦乎張流) 山かも(『万葉集』卷十三・雑歌・三二四九・旧三三三五・反歌／『五代集歌枕』一七二四／『歌枕名寄』四八九六／『夫木抄』一二四五)

⑪春はただ花こそは咲け野辺ごと錦をはれる秋は優れり
(『論春秋歌合』二・右・こたふ、とよぬし)

⑫霞たち野辺を錦にはりこめて花のほころぶ春は優れり
(同・五・左・くろぬし)

⑬浅緑花の錦をはる霞いくらと知りて急ぎたつらむ

(『尊経閣本元輔集』麗景殿の(以下欠)・霞・一三六)『枕草子』以後は、逆に秋が優勢になる。⑭は春の「衣笠岡」だが、⑮は秋の「衣笠岡」、⑯は秋の「笠松」、⑰も秋の「梢」で、「張る」縁語の「笠」も目立つ。さらに後の例歌は、『琴後集』の春秋各一例(七〇九・一二五二)など少ない。

⑭花盛り衣笠岡をきて見れば錦をはれる春の曙

(『為忠家後度百首』桜・岡辺桜・七一・為忠)

⑮誰か来ば(いづれの山に手向くとて)衣笠岡に錦はるらん
(『経家集』三三三・右大臣(兼美)家百首に、紅葉を)

⑯錦はる秋の梢を見せぬかなへだつる霧の闇を作りて(『山家集』上・秋・四八〇・霧中紅葉／『夫木抄』五三五五)

⑰おのづからいそしの峰や曇るらんおのれ錦をはるの山蔭

〔『夫木抄』卷四・春部四・花・一二九五・建保四年へ一
二一六〕内裏十首歌合・僧正行意／『歌枕名寄』四八九七
類編纂本系統に「まことに『錦を張れる』など（と）見えて」
とあるものの、少なくともこれらの歌の中には、「庭」に散り
敷く落葉や落花を詠んだものは無い。「野辺」の語が地上（平面）
という点で「庭」に近いが、落葉や落花ではなく、草花の「錦」
であった。他の花やみぢの場合は、散る以前の「山」や「木」
に用いられているのである。

また「錦を張れる」という句自体は、¹⁰⁰ ¹⁰¹ ¹⁰⁴にあつた。特
に保延元年（一一三五）頃に詠まれた¹⁰⁴は、「春の曙」もあり、
春秋の違いはあるが、平安末期から鎌倉中期以前における塚本
祖本への増補に影響した可能性が高いのではないだろうか。

〔散文では錦を「敷く」から「引く」へ、「張る」は例外〕

『源氏』では前掲⁹⁰「紅葉のいろいろ濃き薄き、錦を敷きた
る渡殿の上見えまがふ庭の面」以外にも、春の落花に「錦を敷
く」が用いられていた。

¹⁰⁸名も知らぬ木草の花どもいろいろに散りまじり、錦を敷け
ると見ゆるに、鹿のたたずみ歩くも（『源氏』若紫〔八〕）
しかし、その後の散文作品における「錦」の見立ては、和歌
とは異なり（⁹¹ ⁹² ⁹³参照）、散った紅葉や花についての「錦を
敷く」は用いられず、¹¹⁰を除き、「山」や「木」の散る前の紅
葉を「錦を引く」（地面と並行ではなく主に垂直方向に引く）
と表現する例が見える。¹¹³は、前掲¹⁶と同じ場面である。

¹⁰⁹高陽院の有様、……秋深くなるままに、もみぢの薄さも濃

きも錦を引けるやうなり。

（『栄花』卷三十六〔三二〕）

¹¹⁰夏はやまと撫子の、濃くうすく錦をひけるやうになむ咲き
たる。……足柄山といふは、……（『更級日記』〔五〕）

¹¹¹足柄といひし山の麓に、暗がりわたりたりし木のやうに、
茂れる所なれば、十月ばかりの紅葉、四方の山辺よりもけ
にいみじくおもしろく、錦をひけるやうなるに（同〔一一〕）

¹¹²斎院のわたりの紅葉もいみじう盛りにて、色々錦引き渡し
たるやうに見渡されたるに、（『狭衣』卷四〔三三六〕）

¹¹³十月ついたちごろ、……紅葉の色々おもしろく、錦を引け
るやうなる山のかたを、……（『寝覚』卷五〔三四〕）

「錦を引く」は、歌の例もあるが少ない。

¹¹⁴深山にはむらむら錦引けるかと見るにつけても朝霧ぞ立つ

（『好忠集』〔毎月集〕九月上・二五三）

¹¹⁵もみぢする四方の高嶺を見渡せば空に錦を引きぞ巡らす

（『教長集』秋歌・四八四・東山辺にて、連峰紅葉）

¹¹⁶水の面にもみぢ散り敷く浮き橋を引き渡したる錦とぞ見る

（『為忠初度百首』冬・橋上落葉・四五三・仲正）

¹¹⁷深山深くもみぢしにけり冬来れば錦を引ける心地のみして

（『熊野懐紙』建仁元年〔一一〇一〕藤代王子和歌会・詠

二首和歌・詠深山紅葉和歌・因幡守通方・七九）

これらの歌や平安後期の散文に用いられたのは、¹¹⁴の好忠歌
の直接的な影響もあろうが、『源氏』の前掲⁹⁰の波線部「ため
しにひける庭の錦を」や、次の¹¹⁸の影響もあるのではないか（特

に¹¹²や¹¹⁶は「引きわたす」）。¹¹⁴の「霧」に対し、¹¹⁸は春の「霞」

で、傍線部は確かに「春霞の美景の比喻。大和絵を連想させる。」（『新全集』）が、「錦」とある限り、「霞みあひたる梢ども」が「色々」であることは自明であろう。

⑩三月の二十日あまりのころほひ、……こなたかなた霞みあひたる梢ども、錦を引きわたせるに（『源氏』胡蝶（一））さて、このような例がある中であつて、次は例外的と言える。『うつほ』などに見立てではない「錦を張る」の例はあつたが、見立てでは前項で述べたように例歌も少なかった。

⑪やうやう日は山の端に入りがたに、光のいみじうさして、
山の紅葉、錦をはりたるやうに、（『大鏡』人（一九七））

この⑩の存在から、平安後期に「錦を張る」が一時的にせよ韻文・散文を問わず用いられたのは確かである。しかし、これも前項の歌と同じく、本段のような散つたもみぢではない。その点では「枕草子」類纂本の「まことに錦をはれるなど（と）見えて」の見立ては、やはり孤立している。一般的には「まことに錦をしけるなど（と）見えて」とすべきところである。常識的な見立てをあえて排して独自に「まことに……」と述べたのか、表現史にやや不案内であつた結果なのかは、類纂本全体の傾向から明らかにできようが、本稿では「錦を張れる」が常識に完全には一致しないことを指摘するに留めておく。

五、まとめ

以上見てきたことを、繰り返しになるが、まとめておきたい。最初の文は、晩秋から初冬にかけて、曇り空に強風（木枯ら

し）が吹き、黄葉がはらはらとひとしきり散りゆくのが、哀愁を感じさせると述べている。これ自体は伝統的な「悲秋」であるが、従来『蜻蛉日記』『うつほ』などで落涙表現であつた「ほろほろと」の語を用い、同じく落涙の動詞であり⑬元輔歌「誰がためか明日は残らん山桜こぼれて匂へ……」などのように和歌では落花をも表わしていた「こぼれ（落つ）」を用いて、落葉（散りゆく葉）を落涙のイメージと重ねて表現した点に独自性が見られた。当時、⑭義孝歌「夕暮れに木繁き庭を眺めつつ木の葉と共に落つる涙か」のように落葉を落涙に重ねる歌も流行し始めていたが、「枕草子」では非在の「涙」を明記せず、歌言葉ではない「ほろほろと」を用いて、和歌的な縁語・掛詞の方法で「涙のように」と表現している。また「黄なる葉」と色を指定し、『万葉集』より後の和歌で一般的な「紅葉」や「紅葉」を避けている。一方、漢詩文には「黄落」や「黄葉」があり、特に前者は人生の黄昏と重なる秋の「あはれ」を表わす語で、「紅葉〓紅葉」とは別の意味で「涙」と結びついていた。当該文は、⑮『礼記』月令「季秋之月……草木黄落」や、⑯『文選』「秋興賦」所引「楚辞」「九弁」の冒頭「悲秋気……草木揺落」に符合し、特に前者を訓読した可能性が高い。また「ほろほろと」についても、「揺落」の他、⑰白詩句「紅葉紛々蓋歆瓦」などを抛り所に、落花・降雪以外に落葉の表現としても積極的に和漢兼作の場などで用いられた畳語の「紛々」が、ヒントになった可能性が高い。この語は「玉」の見立てにより落涙を表わした例もある⑱。そして当該文の「紛々（ほろほろ）」や「こ

ほれ落つ」からは、落花の惜春の光景も浮ぶ。

次の文は、「桜」と「椋」の葉が特に急いですばやく散ってしまうという発見を述べている。「梅」などの開花の遅速は「遅く」とく開くる花の枝ゆゑに……」（『元輔集』九九）など和歌でもよまれるが、落葉は時期すら問題にされない。もし「いととく」が落下速度を指しているのであれば、一層特異である。具体的な落葉樹名を挙げた点で漢詩文に近いが、それが春を代表し落花も注目される「桜」と、実用的・非文学的な「椋」であるという点で、一般的な「もみぢ」を取り上げない『枕草子』らしさがある。そして、「桜」「落つれ」の語を出すことで、当該箇所落花の光景との重なりは、より確かなものとなる。

最後の文は、初冬十月、木立の多い場所の庭は、木の葉が散り敷いてすばらしいと愛でたものである。『万葉集』以来もみぢは美しく惜しむべき秋の代表的景物として賞美されてきたが、『古今集』までは「山」や「木」の散る前のもみぢか、「河」や「池」「江」など「水」の上や底に散つたもみぢに限られていた。しかし、九〇〇年前後の詩歌において、主に⑦⑧「長恨歌」の「秋雨梧桐葉落時 西宮南苑秋草多 落葉滿階紅不掃」の影響で、孤独感を表わすものとして「宿」や「道」に散つたもみぢが詠まれるようになったという。その中に「庭」の語を持つ⑨伊勢歌「紅に掃はぬ庭になりけり……」もあった。一方、『後撰集』になると、「山」や「林」「宿」など地上に散つたもみぢの美にも『万葉集』以来の「錦」の見立てを用い、「錦を敷く」と愛でた歌が取り上げられるようになる。また、『古今集』

以後、躬恒は和漢兼作の場で⑩「庭の面に唐紅になるまでに……」と孤独とは無関係に「庭」に散つたもみぢの叙景歌を詠み、同じく和漢兼作の敦信の⑪「落ち積もる庭の紅葉は唐錦まづ如く（敷く）ものは無しとこそ聞け」など、「庭」に散つたもみぢを積極的に愛でる歌が詠まれるようになった。『枕草子』は、この興趣をいち早く仮名散文に取り込んだのである。そこには、『後撰集』撰者の一人でもある元輔の落花を愛で惜しむ歌、⑫「花の蔭たたまく惜しき今宵かな錦を晒す庭と見えつつ」の直接・間接の影響も考えられるが、「錦」の見立ては避けている。また、白詩の「晩秋閑居」の⑬「秋庭不掃携藤杖 閑踏梧桐黄葉行」は、「庭」の語を含み、もみぢを愛でるという点でも詩人や歌人達が⑭「長恨歌」以上に依拠したのであろうが、『千載佳句』にもあり、最初の「黄なる葉」や次文の具体的な樹木名も類似することから、本段においても踏まえられた可能性が高い。なお、類纂本系統の本文にある「錦を張る」の見立ては、「山」や「木」や「野」の花やもみぢに対して用いられ、早くは『万葉集』⑮にあるが、「庭」に限らず散つた花やもみぢの例は無い。「まことに」とあるが実は例外的であった。平安末期に「笠」の地名などと共に流行した表現であり、他の散文が恐らく『源氏』の影響でもつばら「錦を引く」を用いる中であって『大鏡』にも見られ、その時期の後補と考えられる。

これらは、晩秋・初冬の「風」に散る、そして散つた落葉の様を視覚的に描いて「悲秋」「惜秋」を表現したものであるが、用語から、春の終わりの落花と重なり合うのである。

このように当該三文は、平易で写生的だが、新奇で孤立した
ものではなく、詩歌や仮名散文の伝統との関わりが見出せた。

この落涙と重なる「ほろほろと」の落葉表現や、「庭」に散つ
たもみぢの美という「風」と木の葉に関する散文表現は、⑬⑭
や⑳(藤裏葉(一五・一六))などの『源氏物語』でさらなる
展開を見せる。本段冒頭近くの「三月ばかりの夕暮れに、ゆる
く吹きたる雨風。」も、落花や惜春の情の指摘の他、夙に藤裏
葉(二二)との関係が注目されてきた。「野分」以外にも『枕草子』
の「風」の表現は先駆的、示唆的であったと言える。

以上は、管見に入った例に基づいたもので、見落とした重要
なものもあるが、ある程度は表現史上の位置づけができたか
と思う。当該三文は千年後の読者にとっても非常にわかりやす
い表現であるが、その位相を明らかにするためには、手続き、
つまり注釈が必要であった。特に『枕草子』の自然描写につい
ては、出典論としてではなく、言語文化の継承として、他にも
詩歌の表現との関係をさらに見ていく必要があると思われる。

例えば中学校の国語教科書にも掲載されている次の文など
も、従来の表現との距離を測つてこそ、素材や見立ての独創性
が明らかになるだろう(拙稿『枕草子大事典』二一八段)。

(m)月のいと明きに、川をわたれば、牛の歩むままに、水晶な
どのわれたるやうに、水の散りたるこそをかしけれ。

(二一六段・全文)

もちろん、手続きが無くても千年後の読者が簡単に理解・納
得・共感できることが、『枕草子』の大きな魅力の一つである

には違いない。しかし、さりげないが分析に耐える表現であり、
奥行き(言語文化的背景や言葉による人脈^{ネットワーク})を探ることも、
一方では必要だろう。もとより唯一絶対の解釈などは無いと思
われるが、解釈の自由や、作者の感性に対する賞賛を、以上の
ような手続きを避ける口実にしてはならないと思うのである。

六、補足―三者三様―

もみぢは「錦」の他に、散る様が「幣」や「涙」「雨」「時雨」
に(『古今集』三〇五・躬恒、前掲伊勢⑳、「うつほ」国譲下(二二
四)等々)、散ったのが「舟」などにも見立てられるが、「雨」
は漢詩の表現に拠り次のような聴覚表現にもなった。

⑳秋の夜に雨と聞こえて降りつるは風に乱るる紅葉なりけり
(『後撰集』秋下・四〇七・題知らず・よみ人知らず)／寛
平御時后宮歌合』秋歌・右・九五・初句「秋の夜に」、四
句「風に散りつる」／『拾遺集』秋・二〇八・題知らず・
貫之・「降るものは」「風に従ふ」／『拾遺抄』(一一九)

『枕草子』では、落葉の聴覚表現は無く、「檜」の葉が五月
雨に打たれて音を立てる比喻を、そのまま引いている。

(n)檜の木、……五月に雨の声を学ぶらむも、あはれなり。

(二三八段・花の木ならぬは)

⑳長潭五月雨水気を含み 孤檜終宵雨声を学ぶ

(『佳句』草木部・水樹・六〇二・方干・陶詳校書陽隱居)

一方、道真・貫之の後、『文集』卷三・〇一三一「上陽白髮人」
に拠り、道綱母、次いで和泉式部らが詠み始めた聴雨^⑳(雨音

を聴く)の例は、孤独と無関係なものも含めて無い。

このような孤独感や見立てなどに対する姿勢が、和泉、赤染、清少納言において、『文集』など漢詩文の表現を踏まえて、言葉を共有しつつ、三者三様に一貫しているのが興味深い。

和泉式部は、聴雨の他に雁の歌でも、「青紙」と「文字」の漢詩に始まる見立てを取り込んで新しく隊列を詠みつつ、⁹⁹ 結句に「雁が音を聴く」という『万葉集』以来の聴覚表現を用いて、訪れの無いこと、人恋しさを詠んでいた(『和泉式部続集』五九七)。そして⁹⁵の「庭」に散り敷く紅葉も、⁹⁴伊勢歌と同じく孤独の表象であった。いずれも独詠歌で哀感がある。

一方赤染衛門は、娘の「文字」を「空」の隊列に見立てて詠み(『赤染衛門集』三三五)、「庭」の紅葉については、⁹⁸の落花の美との優劣論を含む賞美の歌を詠んだ。いずれも贈答歌で、機智的な明るさがある。⁹⁷の「とく」と紅葉狩りを催促する贈答歌もあった。さらに次のような歌もある。「鳥」はあまり歌に詠まれないが、漢詩文では家族愛の深い鳥とされ、『枕草子』初段でも踏まえられている。ここでも、「啞々」たる鳴き声を詠み込み、「床」の語があるためか、六八段「たとしへなきもの」の「夜鳥」と同じように、微笑まじさを感じさせる。

¹²²夕暮れは梢の床や紛ふらんこれかかれかと鳴く鳥かな
(『赤染衛門集』二三四・同じ御社に籠りたりしに、暮るれば鳥どものかしましかりしかば)

¹²³噴噴たる児を護る鵲 啞啞たる母子の鳥

(『文集』巻八・〇三六三・官舎)

但し対象となる人々の状況によっては痛切な歌となる。「ほろほろと」の雉の歌¹⁰や道済哀傷歌(同・五一七)、次の子どもを亡くした時の歌も、その一例である。だが孤独感ではない。

¹²⁴散り紛ふ紅葉を見てもねをぞ泣く我が木(子) 枯らしの風のつらさに(同・五二一・風吹くに、木の葉の散りしを)
これらに対し清少納言は、まず百首歌を含め歌を選択しなかった点が異なる。『枕草子』初段では、新風和歌と同じく雁の隊列を視覚で捉えるが、文字や琴柱(『大斎院御集』一七詞書)の見立てを用いていない。「櫓声」の聴覚的比喻も無い。詩歌の比喻の型をそのままは用いず、散文ならではの表現で描くことは、本段の落葉や前掲の「割れた水晶」も同じであった。

なお、須磨巻にはその聴覚の比喻が用いられていた。舟は鳥に見え、鳥の声は舟の楫の音に聞こえたという。舟も雁も須磨と都を繋ぐものであり、それゆえ望郷の念が強まるのである。

¹²⁵(沖の舟どもを) ほのかに、ただ小さき鳥の浮かべると見やらるるも心細げなるに、雁の連ねて鳴く声楫の音にまがへるを、うちながめたまひて、涙のこぼるるをかき払ひたまへる……
(『源氏』須磨(二五))

右で用いた三者三様の語は、「あはれ」も「をかし」も伝統的な型に結晶させた和歌と、文脈を持つ物語と、自由な散文による写生文の三つにも言えるだろう。いずれにしても『枕草子』には独自の達成がある。観察と、詩歌の伝統と、散文表現の可能性の追求とによる、創造的な言語芸術の一つなのである。

七、おわりに―文脈のスリカエ―

最後に、別の角度からもう少し当該箇所を見ておきたい。最初の文にも「落つる」、次にも「落つれ」があった。つまり、「落つ」という語を軸として、「黄落」という自然の摂理から、普通は誰も問題にしない木の種類による落葉の「はやさ」の違いに話が移っている。どちらも落葉を取り上げているが、「あはれ」から「をかし」に文脈がずらされているのである。この「落つ」のように、ある言葉を別の文脈で捉え直すこと。これは掛詞などに見られる和歌の方法である。しかも、日記的章段の表現方法にも、通じると思われるのである。

例えば、一五六段「故殿の御服の頃」の段では、「四月」の道隆死後の三ヶ月間を、斉信との秀句の応酬を思い続けた時間という角度から語り、服喪中であることは冒頭に明示した上で、悲しみとは別の意味づけをしていた。

また、八〇段「もののあはれ知らせ顔なるもの。洩垂り間もなうかみつ物言ふ声。眉抜く」(全)は、題と項目との関係自体に肩透かしがあるが、元夫則光との別れを語った前段から続けて見ると、一層「あはれ」の文脈のずらしが際立つだろう。

また、九一段「ねたきもの」の「南の院におはします頃」以下の縫い物競争(k)は、萩谷氏以来、東三条南院と解した上で道隆薨去による喪服の裁縫と見る説が有力であるが、二条南宮と解し二六〇段の積善寺供養前夜の出来事とする新説を、坏美奈子氏が出されている³⁰⁾。その根拠の一つに「笑ひののしる」と

いう場面の明るさがある。しかしこれも、一家の大黒柱を失った衝撃の中で、「素服裁縫」という急務に(一致団結して)必死に取り組む自分達の姿を、背景から切り離して眺めて、右で述べたように、滑稽な側面をのみ書き記したのではないか。事実と異なることを記したのではなく、文脈を変えたのである。

これらは、三田村雅子氏の言われる「複眼的視点の導入」「虚構の方法」³¹⁾に当たる。但し、それを行ったのは、「容貌と出身からくるコンプレックスに故に、疎外された存在でしかなかった清少納言」だからではなからう。随想的章段にも通底する、『枕草子』における物の見方、描き方の特徴なのである。表現者としての特質と言ってもよい。

このような文脈のずらし、あるいはスリカエは、繰り返しになるが、和歌的である。『枕草子』は、主に日記的章段において、「雲」「門」「火」などの定子の重大事を象徴する、喚起力の強い言葉を「つれなく」用いていた。歌枕・歌言葉の記号性と同じである。そうとも読めるしそうでないとも読める。自然描写に託した恋歌の手法に近い。そういった意味でも、『枕草子』の言葉は伝統と関わり、しかも新しいのである。

注

- (1) 拙稿『枕草子』二十五年―この草子をどこに置くか―(『国語と国文学』82-5、平17・5)。
- (2) 角田典子氏「枕草子「風は」段解釈について」(『枕草子探求』昭55・12)も、平安朝では嵐が秋冬のものであり、

本段の形容詞から強風とわかるので、冒頭の「嵐」を全体のテーマとされる。また、単なる春風や秋風ではなく「晩春・晩秋の季節の節目」「季節の移り変わり」の「風」を取り上げていることに注目する点は、本稿とも重なる。

(3) 前田家本を一部挙げておく。堺本は若干異なり、特に末尾は「秋の露をおもひやられて、をなじ心に」である。

六月廿余日ばかりに、……いさ、か風のけしきもなきに、いと高き木どもの木暗き中より、黄なる葉の、一つづつやうやうひるがへり落ちたる、見るこそ、あはれなれ。「一葉の庭に落つる時」とかいふなり。

(4) 静永健氏は、「黄葉」が「紅葉」にかはるまで——白居易と王朝漢詩に関する一考察」(『白居易研究年報』1、平12・

5)で、『文集』の影響下に平安時代に「紅葉」が大流行したという小島憲之氏の指摘を進めて、特に「林間暖酒焼紅葉 石上題詩掃緑苔」(巻十四・〇七一五)「佳句」七七九九／『朗詠集』二二二)の影響や、道真の功績を重視されている。⑦「長恨歌」の「紅」の影響も大きいだろう。

(5) 沢田正子氏「蜻蛉日記——枕草子への揺曳」(『平安文学研究』最終輯、昭63・10)や注(1)拙稿など。

『佳句』の影響については、注(8)の近藤氏の御論文や、小野泰央氏「蜻蛉日記」における漢詩文表現」(『東洋文化』78、平9・3)と「千載佳句」小考——同時代における影響関係を中心にして——(『教育・研究』7、平5・12)が詳しい。拙稿「枕草子」初段と和漢の類書的首巻部類標

題の関係についての覚書」(『和漢古典学のオンとロジ』1、平16・3)と「枕草子」初段「春は曙」の段をめぐって——和漢の融合と、紫の雲の象徴性——(『むらさき』44、平16・12)でも、『枕草子』との関係を述べた。

(6) この歌自体は『枕草子』との関係は特に認められないが、清輔と『枕草子』の関係は深い。久保田淳氏は、「枕草子の影響——中世文学」(『枕草子講座 第四卷』有精堂、昭51)等で、『枕草子』が「歌人必読の書」であり、「一種の歌学書のような意識で読まれていた」とし、影響歌を家集から「……秋は夕べと誰か言ひけむ」(一一三)等五首を挙げ(一・六三・三三〇、二六八)、『奥義抄』の蟻通明神の縁起も『枕草子』を取り込んだものかとされる。芦田耕一氏も、「清輔の反伝統的詠歌」(『島根大学法文学部紀要言語文化学科編』5、平10・7)、『六条藤家清輔の研究』和泉書院、平14)で、(d)を踏まえた歌(一〇六)を加え、清輔が意識していたことは明らかだと結論されている。

また『袋草紙』は、拙稿「物語史の中の〈草子〉——〈草子〉の転機としての枕草子——」(『古代文学研究 第二次』10、平13・10)で述べたように、百科全書的・作法書的性格や、分類意識、類聚的要素、連想による繋がりなど、『枕草子』との共通点があり、書名について、作者自ら「囊」という作品の内容に深く関わり、かつモノ(調度品)を表す語を選んだ点は、特に看過できない共通点である。さらに下賜された「造紙」に記した点も共通する。また、『初

学抄』物名の排列における「天象」の優先や、「歳時」が時間帯を含むことへの『枕草子』初段の影響は、注(5)の両拙稿で述べた。さらに、前田家本の「は」型章段の排列(天、地、水、居所、寺社、植物、動物、仏神、人倫、官職、疾病、見物、諸芸、装束、服飾・調度)は、特に人事が動植物よりも後にある点で、『初学抄』や他の歌学書や辞書類と異なり、『奥義抄』二十三「物異名」の挙げ方に最も近い。拙稿『『枕草子』「は」型類聚章段と和漢の類書の部類標題との比較・対照——三卷本・前田家本と『藝文類聚』『倭名類聚抄』を中心に——(『和漢古典学のオントロジ』2、相田満氏編、国文学研究資料館、平17・3)。

(7) 詩の転・結句「残りの嵐軽く簸ひて千の匂ひ散る」此れより桜花客の情を傷ましむは、風による落花とも詠める。

(8) 松浦正浩氏「枕草子の和歌機能——章段構成論理の一視点」(『語文』79、平3・3)、山口美夏氏「『枕草子』の表現についての一考察——好忠および河原院周辺の歌人詠との関連を中心に」(『語文』84、平4・12)。注(1)拙稿でも触れた。注(5)拙稿とも関わるが、『うつほ』にも散見する歌言葉「紫の雲」を流行らせたのも彼らしい。

また、近藤みゆき氏「平安中期河原院文化圏に関する一考察——曾祢好忠・惠慶・源道済の漢詩文受容を中心に——」(『千葉大学教養部研究報告』A-22、平2・3)と、小野泰史氏「『元輔集』と同時代和歌——漢詩文表現の浸透度を中心として——」(『和歌文学研究』71、平7・12)は、『枕

草子』への言及は無いが、示唆的である。

近藤氏は、好忠が「自然詠を中心に、いくつかの新しい表現性を詩文受容によって獲得していること」、「着想を漢詩文世界に求めながらもそれを奥に沈めて、あくまで表現としては自らの言語感覚・造語力を駆使した自らの文体として歌の完成を目指していく」ことを指摘されたが、「歌」を「仮名散文」に置き換えると、正に本稿で取り上げている『枕草子』の方法意識そのものになる。山口氏が指摘されたように『枕草子』の表現と類似・共通し、かつ希少な歌言葉やその組合せが、特に「毎月集」や「好忠百首」に多いのも、その志向の共通性に因るのだろう。

また小野氏が指摘された、元輔歌の特徴のうち、「鶴の羽の白さ」の喩えを「雪」から漢詩文表現に拠り「霜」(「白髪」を重ねる)に変えたこと(『元輔集』一七一)、従来の「残りの菊(残菊)」ではなく「老ゆる菊(老菊)」を用いたこと(一一三五・一一三七)、「潤底の松」を「桜花」に置き換えて不遇感を述べたこと(七)、白詩句「鶯声誘引花下」を「松虫の音」と「紅葉」に景物を改変したこと(『尊経閣本元輔集』二四)なども、本稿で取り上げた『枕草子』の方法と共通すると言える。中でも「こぼる」や「庭」に散り敷く美は、他ならぬ元輔の落花の歌①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺を落葉に置き換えたものでもあった。

(9) 注(21)三田村氏御著書や、内田暁子氏「『枕草子』論攷——「あはれ」をめぐる——」(『大妻国文』27、平8・3)等。

(10) 西山秀人氏『枕草子』の新しさ―後拾遺時代和歌との接点―(『学海』10、平6・3)。

(11) 注(3)に同じ。なお、注(15)三木氏は『古今集』二八六番歌③や長谷雄の「落葉吟」の、落葉に人生のはかなさを見出す発想の背後にあるものとして、『文集』巻十八・一一二・新秋「二毛生鏡日 一葉落庭時」を指摘されるが、注(10)の西山氏によると、この段にも引かれている。『枕草子新註』が「ここに該当しない」とするのは、語句が完全には一致しないの意だろう。「飄零」は、注(15)参照。

(12) 『師通記』の雪月花の描写については別稿を準備している。

(13) 渡辺秀夫氏「古今集時代における白居易」(太田次男氏他編『白居易研究講座 第三巻 日本における受容(韻文篇)』勉誠社、平5)。

(14) 菊沢喜八郎氏『北の国の雑木林 ツリー・ウォッチング入門』(蒼樹書房、昭61)一三三頁、同氏『葉の寿命の生態学―個葉から生態系へ―』(共立出版、平15)五一頁等。

(15) 三木雅博氏「紅葉降るやど―古今集時代における「長恨歌」享受の一端―」(『大谷女子大國文』22、平4・3)『平安詩歌の展開と中国文学』和泉書院、平11)。

氏は「もみぢ」が「降る」という表現について、上代に見られず、「雨や雪のように盛んに散っていることを表現しようとした、平安びとの新しい言い回し」であり、その先駆けが『経国集』巻十三・紀長江・奉試賦得秋の「黄葉飄零秋欲暮」などではないかと指摘されている。確かに「飄零」は「軽く柔らかなものが風に従って空中から落ちてく

る様」を表わし、「雪などに用いることが多い」。『文選』「雪賦」の末尾近くにも「従風飄零」とあるが、落涙や降雨には軽すぎると思われる。もちろん、右が降雪表現の落葉に用いられた先例であるという指摘はもつともである。

また、「道」を「埋む」落葉・紅葉でも、注(8)近藤氏が指摘された「山里」「山路」のそれ(『好忠集』二六四、「道濟集」七、『輔親集』一二五)は、別系統であろう。

(16) 鈴木宏子氏「へもみじと錦の見立て」の周辺―漢詩文と和歌の間―(犬養廉氏編『古典和歌論叢』明治書院、昭63)『古今和歌集表現論』笠間書院、平12)。

(17) 注(8)に同じ。また、寛仁三年(一〇一九)任地筑紫で亡くなったのを聞いて、赤染衛門が暇乞いの挨拶の時のことを思い出し、哀悼している(『赤染衛門集』五一七)。

(18) 三木雅博氏「聴雨考―表現素材の獲得と定着をめぐって―」(『中古文学』31、昭58・5)。注(15)の御著書所収。

(19) 岩井宏子氏「雁」の詩と「かり」の歌(『国文目白』39、平12・2)。注(5)「むらさき」の拙稿でも触れた。

(20) 坏美奈子氏「枕草子」「南の院の裁縫」の条の事件年時について(上)(下)、『語文』84と85、平4・12と平5・3)『新しい枕草子論 主題・手法』そして本文『新典社、平16)注(1)の拙稿でも触れた。

(21) 三田村雅子氏「枕草子の虚構性」(『枕草子講座 第一巻』有精堂、平50)『枕草子 表現の論理』有精堂、平7)。